HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一般教育:現場からの一試論
Author(s)	米山, 喜久治
Citation	經濟學研究, 51(4), 151-206
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32245
Type	departmental bulletin paper
File Information	51(4)_P151-206.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 51-4
北海道大学 2002. 3

＜研究ノート＞

一般教育

——現場からの一試論——

米 山 喜久治

1．問題提起

明治政府は，19世紀ヨーロッパにおいて確立した学問的専門化を前提にして近代大学制度を導入したが，そこには後発国としての独自の工夫も加えられていた。世界に先駆けて「工学部」を大学の正規の学部として位置づけたことと「芸術学部」を学部編成から除外したことである[1)]。

大学は国家の要請に従い知識と技術を持った人材（官僚や技術者）の育成を図ったが，それはあくまでも選ばれた小数者のための「エリート教育」(個人的接触と小人数教育)であった[2)]。

1930年代の中国侵略戦争に続く無謀な対英，米，仏，蘭の太平洋戦争で惨めな敗北を期した日本に残されたものは，爆撃による廃墟と餓えであった。戦後のタケノコ生活のどん底から立ち上がり始めた日本国民を広くとらえたものは，新憲法の掲げた平和国家の理想への共鳴と健康で文化的な生活への憧れであった。人々の明日への希望は，貧しくとも子弟の教育を最優先する生活態度として具体的に表現された[3)]。

経済復興から高度成長を迎える時期の1960年（昭和35）の中学卒業者に占める大学，短大の入学者数即ち進学率は，10.3%であった。15年を経て75年には37.8%へと3.6倍に急上昇したのである。オイルショック後75年以降は35%を超えており，この傾向は90年代も続いている。進学率は1995年4月，45.2%となり97年5月には47.3%，2000年には49.1%に達している[4)]。戦後日本の高度経済成

1）ヘンリー・ダイアー／平野勇夫訳(1999)『大日本』実業の日本社
三好信浩（1983)『明治のエンジニア教育』pp. 15～50 中公新書
「工部省（工部大学校）には，ヘンリー・ダイヤー(Henry Dyer)を長とするスコットランド人技術者が，(教官として9名）招聘された。ダイヤーによれば［工部大学校のモデルとして］日本に導入しようとした工学教育機関は，イギリス・モデルではなくて，当時チューリッヒ工科学院においてのみ見られたような理学と工学を融合したスイス・モデルであったとされる。」
中山茂（1993)「日本の高等教育に対する西洋のインパクト—自立と選択」p. 143
P. G. アルトバック／V. セルバラトナム編／馬越・大塚監訳(1993)『アジアの大学—従属から自立へ』玉川大学出版会
明治維新を実現したサムライたちの現実主義と一種のプラグマティズムについては，
カッテンダイケ／水田信夫訳（1964)『長崎海軍伝習所の日々』平凡社東洋文庫
Eiko Ikegami(1995)"*The Taming of the SAMURAI-Honnorific Individualism and the Making of Modern Japan*"pp. 327～380 Harvard University Press

2）中山茂（1978)『帝国大学の誕生』中公新書

3）米山喜久治（1993)『探究学序説』pp. 3～5 文眞堂

4）文部省編（2001)『文部統計要覧』(平成12年版) 大蔵省印刷局
学歴別年功的労働市場においては，卒業大学（国立［旧帝大系，一期校，二期校］，公立，私立［戦前設立校，戦後設立校］）によって就職先の企業規模が，明確に分けられていた。
日本リクルートセンター『大学生の就職内定状況調査』(昭和55年度)

長に伴う国民所得水準の上昇により，家計における教育支出の余裕が生まれ，その結果高等教育機関に学ぶ者の比率は，増大した。このように今日の日本では同世代の半数近くの人々，平均的な能力を持ち，学費の経済的負担に耐えられる普通の人々が大学等に通っているのである。

進学率が20%を超えて23.6%に達した1970年には大学教育の社会的役割に質的に大きな変化が起こったのである。すなわち「エリート教育」から一般市民のための「マス教育」への質的転換であり，大衆化のさらなる進展である[5)]。

明治以降1世紀を経て，日本人はやっと「国家のために役に立つ人材になる」ための教育対象であることから開放され，個人として自己の人生と職業能力を開発するために学ぶ主体である可能性を手にしたのである。

戦後の経済復興に続く政府の産業政策（護送船団方式による国内産業保護と規制）は国際競争力を持つ産業育成を中心課題とし，そのための資源配分を最優先に行なったのである。重化学工業（鉄鋼，造船，石油化学，自動車等）の新鋭工場が，財政投融資などの優遇措置で続々と建設，操業され，輸入代替から輸出指向を強め外貨を稼ぐ任務を忠実に遂行していったのである。しかし急成長する産業界が教育機関に求める労働力はあくまでも「素材」であり，必要とされる熟練の形成，人材育成は，個別企業の企業内教育訓練によって行なわれたのである。

学歴別労働市場を基盤に企業内教育による熟練形成で必要とされる人材を確保する企業の人事政策を反映して政府（大蔵省）は公的教育機関への投資，資源配分をミニマムにする政策を堅持したのであった。学生の急増に対応した設備投資はなされず，大学の教育・研究のインフラである教室，演習室，受験室，研究室，図書館，体育施設，食堂等は，劣悪なままに放置されたのであった。特に文科系学部では，先進国の理論の翻訳と紹介を行う講義（マスプロ教育）が大教室でマイクを使って行われることが一般化することになった。

戦後日本の高度成長を支えたのは，欧米先進諸国からの貪欲なまでの技術導入であり，輸入された基礎技術，基本パテントを，現場の創意工夫で，改善し，規格品の大量生産システムを開発することであった。このような経済成長を実現しうる人材は，《やる気》，《バイタリティ》，《協調性》を備えた若者であった。基本モデルが存在して自社のマイナー・チェンジを加えた規格品の大量生産とその販売におけるマーケットシエアの獲得競争をするだけのビジネスには個性や独創性は必要とされなかったといえよう。

企業は，企業目標の達成に献身する会社人間，企業戦士として24時間戦い，過労死も辞さない労働力を求めており，これには厳しい受験競争を勝ち抜いた高校レベルの基礎学力と一般常識，体力だけで十分であったのである[6)]。

5）大学教育の「エリート」から「マス」への量的発展と質的変容については
マルリン・トロー／天野・喜多村訳（1976）『高学歴社会の大学』東京大学出版会
専門教育を中心にカリキュラムのモジュラー・システムが進み，これがアメリカの大学のマス化を推進したのである。大学を越えて「単位」の取得，組合せが自由に出来るシステムは，アメリカの高等教育の多様性と柔軟性の基盤となっている。しかしこれにはカリキュラムの一貫性がないのである。
Sheldon Rothblatt／吉田文・杉谷祐美子訳（1999）『教養教育の系譜—アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』IV カリキュラムの構成—モジュラー・システム pp.111～130　玉川大学出版部
しかしこのモジュラー・システムは，知識の標準化と教育サービスとのマニュアル化を進めて，教員と学生の人間的交流を妨げている。
ジョージ・リッツア/正岡寛司監訳(1999)『マクドナルド化する社会』pp.224～226　早稲田大学出版部
1990年代アメリカの大学では，伝統的なスタイルの高等教育は，成立しなくなってしまった。甘やかせば授業にならず，厳しくすれば学生による授業評価で教員は職を失ってしまうのである。
ピーター・サックス／後藤将之訳（2001）『恐るべきお子さま大学生たち—崩壊するアメリカの大学』草思社

6）川上博人（1980）『過労死』岩波新書

大学の教育課程も文部省が定める設置基準を最低限満足させるマスプロ方式で事が足りたのである。コストと時間をかけた密度の高い個人指導による個性や独創性を持った若い人々を育てる必要はなかったのである[7]。

オイルショック以降低燃費と廃棄ガス基準をクリアした小型車を生産しうる日本的経営システムは世界最高とうたわれた[8]。日本的経営システムは世界の注目を浴びて我が世の春を謳歌したのであった[9]。

日本の国際収支は1980年代には巨額の貿易黒字を獲得し明治の建国の志士たちの悲願であった先進諸国へのキャッチアップが達成された。しかしアメリカの財政赤字，貿易赤字に基づくドルの下落に対応した急激な円高に直面して，輸出依存の国内産業は円高不況に見舞われたのである。企業は，輸出指向の高度成長路線を修正して，生き残りのため事業の再構築（リストラ）に取り組まざるを得なかった。

日本が重化学工業をリィーデイング・インダストリーとして高度経済成長をとげて先進国へのキャッチアップに邁進している間に国際環境は，大きく変化してしまったのである。韓国，台湾，シンガポールなどの新興工業諸国が，日本を急速に追い上げる一方アメリカには，インテル社とマイクロソフト社に代表されるハイテク産業，情報産業が勃興して，マルチメディア時代の世界をリードするに至ったのである。軍事技術からスタートしたインターネットによって，東西冷戦に勝利して世界の唯一の帝国となったアメリカは戦略的に世界市場の独占的地位を欲しいままにしているのである[10]。

日本の社会システムは，技術導入型から内発型，自主技術開発型への脱皮発展をとげなければならない。1990年代に入り日本は低賃金と規格品の大量生産で追い上げてくる後発工業国とサービス，情報，ソフトの開発・販売でリードするアメリカの間に立たされているのである。独創的研究開発に基づく，ユニークなハードとソフト商品の開発が，火急の課題となっている。経済の急速なサービス化，情報化，国際化時代を先端的に開拓しうる人材育成が必要である。だが明治以降のキャッチ・アップ型思考を維持強化する文部省の一元的支配が貫徹する従来の教育システムは，機能不全を起しているのである。大多数の日本人は，同一パターンの円環的思考の自家中毒に陥っているのである。根拠なき楽観主義に立って，問題の深刻さから敢えて目をそらそうとしているのではないだろうか[11]。

7）大学のマスプロ教育化に対する新しいモデルとして，野外科学の学習と研究を目的とした2週間テント生活方式による「移動大学」が，1969年文化人類学者川喜田二郎によって提案，実践された。顔と顔の直接的な人間関係の回復とチームワーク能力の向上も目標とされている。
川喜田二郎（1971）『雲と水と―移動大学奮戦記』講談社
黒姫移動大学における小集団が，“問題解決の方法論”としての(KJ法+BS+PERT)の学習・修得によって，自分たちの共同生活，学習空間におけるコミュニケーションの改善を実現するためのフィールドワークによる問題解決行動については
米山喜久治（1993）『探究学序説』pp.189～195　文眞堂

8）日刊工業新聞社編（1980）『ホンダの小集団活動』にっかん書房

9）MIT生産性調査委員会／依田直也訳（1990）『Made in America』草思社

10）田原総一郎・月尾嘉男（2000）『IT革命のカラクリ』時事通信社
W. Janes/SE編集部訳（1992）『ビルゲイツ：巨大ソフトウエア帝国を築いた男』翔泳社
A. S. Grove／小林薫訳（1996）『インテル経営の秘密』早川書房

11）大学入試に支配され偏差値教育に苦吟している高校では学校間に偏差値によって単に知識のレベルだけでなく人間的資質のレベルにおいても乗り越えがたい格差が生じている。
「机に住み着いた軟体動物-不気味な無反応の生徒たち」,「運動能力にも学校格差-学校文化は崩壊した」「あるのは“勉強も生活習慣も運動も出来る子”か“勉強も行事も生活習慣も運動も出来ない子”かのいずれかであり，それがみごとに学校ごとに，偏差値によってこまかくランク付けされているのである」
喜入克(1999)『高校が崩壊する』,pp.28～32　草思社
学歴による日本社会の新しい階層序列化の進展については，苅谷剛彦（2001）『階層化日本と教育危機』　有信堂

日本の教育システムは発展途上国型であり，導入技術を基礎にした規格品の大量生産とその製品輸出で経済成長を遂げる歴史的段階に適応したものなのである。世界的規模での技術の移転と伝播，さらには技術の平準化が進み，いよいよ独創性が問われる“大競争時代”には，既に有効性を失っているのである。導入技術を職人の伝統を生かした現場の工夫改善によって日本化し，生産技術と大量生産システムを開発する方式は，キャッチアップ段階では大きな成果を達成したのである[12]。現時点ではさらなる質的高度化が求められているのである。ハイテクと超熟練を統合しうる技を持った人材の登場が期待されているのである[13]。

明治以来続いてきた大学の研究，教育システムは，1960年代末の学生達の“全共闘運動”の異議申し立てによっても揺らぐことはなかった[14]。しかし1970年代から始まる大衆化と1980年代からの情報化は，大学制度の改革を迫る底流となっていたのである。この底流を一挙に表層流に押し上げたのは，1993年（平成5）の205万人をピークにした18歳人口の減少であり，著しい少子化傾向である。需要供給の視点に立てば，大学入学定員の供給過剰であり，大学が，入学希望者を選抜することから進学希望者が大学を選択することへの逆転である。従って社会的ニーズに応えたカリキュラムと人材育成の出来ない大学は，学生を獲得することが出来ず，経済単位としても存続出来ず，社会的存在理由を失って消滅する道しか残されていない[15]。

従来大学は中央官庁，大企業を頂点とする年功的学歴別労働市場においてその再生産機構の一翼を担い，卒業大学名によるランク付けを行なってきたのであった。1980年代の円高不況による事業再構築（リストラ）は，高度成長期に確立された労使の暗黙の了解による終身雇用を事実上否定したのであった。中高年者の出向，転籍，早期退職がそれである[16]。また新規事業の開拓による経営多角化，分社化に注目しなければならない[17]。激変する経営環境に対応

12) 福山弘（1998）『量産工場の技能論』日本プラントメインテナンス協会
風見明（1995）『「技」と日本人』工業調査会
Yoneyama Kikuji（1995）“Innovation and Jishu Kanri Activities in the Japanese Steel Industry” *Economic Journal of Hokkaido University* Vol. 24 pp. 25－58

13) E. S. ファーガソン／藤原良樹・砂田久吉訳（1997）『技術屋の心眼』平凡社
30年すなわち一世代を経過すると人は先人の失敗を忘れてしまう。失敗の歴史に学ぶことが重要であるとの指摘については，
Henry Petroski／中島秀人・綾野博之訳（2001）『橋はなぜ落ちたのか』朝日選書

14) 東京大学新聞研究所東大紛争文書研究会編（1969）『東大紛争の記録』日本評論社
山本義隆（1969）『知性の反乱―東大解体まで』前衛社

15)「受験人口の減少と大学・短大への志願率の上昇が，このまま続くと，2009年から大学・短大の定員割れが，始まり，志願者のほぼ全員が入学出来る「大学全入」時代が，到来することが，リクルートの進路動向の予測で明らかにされた。」　朝日新聞　1995年12月30日
文部科学省の2001年4月調査によれば，新入生が，入学定員に満たなかった私立大学は，全体の約30%，私立短大では，約55%に達した。大学・短大にとってバブルのピークは，団塊ジュニアの18歳人口が，約250万人とピークに達した1992年度。その後急速に少子化が進み2009年度には約121万人まで減ると推計されている。現実は，予想をはるかに超えた速度で進展しており，高卒後直接大学に進学する若い世代を対象にした従来型の「大学教育」は，「生涯教育・研究」を基本理念にしたものに転換されなければならないことは，明らかである。この場合大学教員の知的，人間的力量が，問われるのはいうまでもないことである。
日本経済新聞記事「学生獲得へ日々是営業―大学，少子化で競争激化」2001年11月17日号
しかし現実の展開は，予想をはるかに上回って進んでおり，2001年4月の段階で大学の3割，短大の7割が，既に定員割れを起こしていることが，報告されている。
大学未来問題研究会（2001）『大予測10年後の大学』東洋経済新報社

16) 鎌田慧（1993）『ドキュメント造船不況』岩波書店

17) 米山喜久治（1998）『現代日本製造業における技術の伝承―造船産業の事例研究』日本労務学会第29

しうる即戦力を持つ人材供給は，自社養成では間に合わず，企業は社外から人材を求めることになったのである。リストラによる中高年層の早期退職と即戦力ある人材の中途採用は，企業別縦割り労働市場に風穴を開けて，労働力流動化の契機となったのである。

さらに90年代に入り企業は国際的に高水準となった賃金コストを低減させるため企業内教育費を削減し，従業員には“能力開発自己責任”の原則に基づく自己啓発を求め始めたのである[18]。リストラによって企業は，企業と従業員の関係を，従業員個人の全人格的な組織への包摂から，仕事（職務）を媒介としたものに組み立て直し始めたのである。企業側からは高い生産性の実現，従業員側からは，仕事の達成による自己実現，職務満足の獲得，職業生活の充実を求める欲求が，見いだした共通点は，キャリア・プログラムの開発・管理である。“一社懸命”から“キャリア”へと現代日本人は働き方，職業生活のスタイルの変更を求められているのである。

国際的大競争時代を迎え撃つべき企業にとっては，それを担いうる中核的人材の確保が，存続の命運を決することは明らかである。企業が従来大学に求めていた単なる“社風になじむ素材としての労働力”の供給を超える要求を開始したのである。すなわち新規学卒者に求められる能力は，大卒者に相応しい基礎学力と知的なマナー，センス，スキルを持ち，自ら企画提案したプロジェクト（一仕事）を推進しうる能力である。円満な人格と《協調性》だけでは激変する経営環境を乗り切っていける人材たりえないのである。異専門，異文化を統合しうる《積極的なチームワーク力》へとより具体化，高度化したのである[19]。

このような日本社会と企業を取り巻く環境変化及び大卒者に求められる能力の変化を正確に把握出来ず，変化を恐れる保身感覚から出された時代錯誤の議論が横行している。これに惑わされてはならないのである。

学生の知力は入学試験で判定できるため「大学は勉強する所ではない」とし，日本の企業が新規学卒者に求める資質は，「能力のある人間」ではなく「使いやすい人間」であると断言する論者がいる[20]。だがこの論者が説く若い学生たちが適応すべき“日本的システム”は過去に有

回　発表論文集
㈳北海道雇用開発協会（1991）『北海道における雇用開発の新たな展開に関する調査研究報告書』同協会
米山稿「第2部　構造改革と職種転換教育ならびにOJTによる育成を進めた企業の実態」

18) 日経連（1995）『新時代の「日本的経営」―挑戦すべき方向とその具体策』日経連

19) 企業の求める人材観は，経営環境の変化に対応して「協調性」から「創造性」へと変化している。
「1995（平成7）年4月の入社式では，トップは円高や国際的な競争激化など経営環境の厳しさを強調，コスト競争力と技術力の強化を訴えかけた。厳しい就職戦線を経験した新入社員に対して，先例にとらわれない柔軟な思考や創造性を期待する言葉が目立った。」日本経済新聞　1995年4月4日号「神戸製鋼平尾誠二引退宣言」
「だから僕は若い選手に“イマジネーションを大切にしろ”と口を酸っぱくして言っています。これが抑圧されるといいプレーも出来ない。（中略）逆にスポーツから忍耐とか協調性とか言ったものしか学べなかった人間は，ろくなもんじゃない。いいプレーもいい仕事も出来ないと思いますよ。（中略）余談になりますけれども，その昔企業は体育会系の学生をこぞって採用したじゃないですか。4年間体育会で頑張った人間は，企業に入っても耐えられる，確実に戦力になる―なんて。でも，こんなのウソもいいとこですよ。（中略）たしかに昔なら“上司に絶対服従”は，会社にとって最大の利点であったでしょうけど，リストラで社員がどんどん減っている企業では，どんどん個人の比重が高くなっているので，かえって困るんです。（中略）上からの言いつけを忠実にするだけの人間は，実際真っ先にいらなくなっていくわけです。」『BART』1996年2月12日号

20) 浅田通明（1996）『大学で何を学ぶか』幻冬社
先進国の教科書に書かれた知識の暗記力を「知的能力」と誤解し，問題には解は1つしかないと思い込んでいるのである。こうした「受験生的思考」は，直面する複雑な問題の解決には無力である。
米山喜久治（1993）『探究学序説』p.82　文眞堂

効であったキャッチ・アップ型の《政・官・財》の鉄のトライアングル・システムである[21]。それは政府の国内産業保護と外国企業の参入規制に支えられたシステムであった。市場開放，規制緩和の21世紀の市場環境には，生き残ることが出来ないものである。

強い生産力信仰を持って実現された高度成長後，日本経済は，何らの新しい社会的価値を生むことなく土地を担保にした“花見酒の経済”でバブル経済へと上り詰めて行ったのである。そして挙げ句の果てが，土地投機による地価の暴騰と天文学的数字の巨額の不良債権の発生であった。さらに問題はこの“日本的システム”は，日本の社会をその深部まで汚染し尽くしていたことである。その具体例は厚生省，製薬会社ミドリ十字，大学研究者の結託によるエイズ薬害事件，動然（動力炉・核燃料開発事業団）の爆発事故とその隠蔽工作事件，野村証券，第一勧業銀行の総会屋との癒着による不正事件，中央官庁，地方自治体など公金不正支出事件等，現代日本社会の腐敗は，留まる所を知らず，その闇はますます深まるばかりである。こうした事件の中心に関与する倫理性と美的感性を失った人間を大量に養成した大学の責任が問われなければならないのである[22]。

国民の頭上に亭亭としてそびえ立つ世の権威としての大学も一度情報公開によってその実態が，人々に知られる所となれば，何人もその権威の正当性を認めることは出来ないのである。

激変する国際環境に直面して1990年代には完全に機能不全を起こしている旧式の日本的社会システムへの順応を若い世代に向かって強調することは根本的に誤っているのである。なぜならば若い世代が現時点で旧式システムに過剰適応すれば，それだけ不確定で予測が困難な将来の国内，国際の諸問題を解決する可能性を失う事になるからである。

現代日本人は自らの人生を切り開き，生活を創っていくためには，まずは困難な諸問題の出来るだけ歪みの小さい全体像を把握することである。次に当事者としての責任において問題を解決する人間力が求められているのである。独創性不要論は，人間としての可能性と幸福を実現する権利を否定し，日本人が経済活動のための単なる労働力や人的資源(Human Resource)に留まることを強要するものである。古い世代の現状維持を秘めたる目的とする時代錯誤の議論は，若い人々の人生を誤らせるものであり，その結果日本社会を崩壊に至らしめるものである[23]。

21世紀の日本人は世界の国家レベルからNGOまでの組織やグループや個人と連携しながら，日本列島をベースにして地球環境問題，食料問題，高齢化問題，産業の空洞化，安全保障問題等の深刻な諸問題を累積的に解決することにより世界に貢献しなければならない[24]。

あらゆる人々に要求されるものは，迫り来る困難な地球環境に対応すべく所属する組織のイノベーションを実現することである。それは同時に主体性を発揮して自己変革をとげることを

21）松尾·青山·高橋(1994)『日本型企業の崩壊』東洋経済新報社
クリストファー・ウッド／三上義一訳（1994）『合意の崩壊』ダイヤモンド社

22）日本経済新聞社（2000）『検証バブルー犯意なき過ち』日本経済新聞社
石井茂（1998）『決断なき経営—山一証券はなぜ変れなかったのか』日本経済新聞社
北海道新聞社（1999）『拓銀はなぜ消滅したか』北海道新聞社
共同通信社会部編（1999）『連鎖崩壊—長銀・日債銀粉飾決算事件』共同通信社
読売新聞社会部（1998）『会長はなぜ自殺したか—金融腐敗＝呪縛の検証』新潮社

23）K.ウォルフレン／篠原勝訳（1994）『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社
C.A.Reich／広瀬順訳（1998）『システムという名の支配者—われわれの社会が変らないのはなぜか』早川書房

24）Paul Kennedy／鈴木主税訳（1993）『21世紀の難問に備えて』（上・下）草思社

意味している。

戦後の高度成長期に形成された《大量生産→大量流通→大量消費→大量廃棄》の社会システムにどっぷりと漬かった浪費三昧の消費生活から「省資源，省エネルギー，環境保全」を原則とする生活スタイルへの転換である。21世紀の「リサイクル」，「ゼロ・エミッション」を原則とする協働，共生社会の建設である。

21世紀の人類史の大転換期に立つ大学の使命は，高等教育，研究機関として，本質的問題の解決に対する人類社会の多様な部門に共有されうる普遍的理念と方法さらには具体的解決策を提示し，地球規模のネットワークを構築して，実践に向けた知的交流センターとなることである[25]。

このように大学の使命が，地球と人類社会への貢献であるとすれば，大学における研究・教育もそれと有機的に連結したものでなければならない。大学は研究機関として第一線の問題解決に挑戦し続けると同時に学生には自らの知的好奇心からスタートした切実な課題を解決する中で理論を学ばせ，個性的な作品を完成させることを通して人間的成長が可能な道を拓くことが出来る教育を実現しなければならない[26]。

1991年国際，国内のマクロ，ミクロの環境変化に対して文部省は遅ればせながら大学教育の高度化，多様化，個性化を掲げて大学設置基準の改定（一種の規制緩和）を行なった。一般教育・専門教育等の授業科目の区分が廃止されることになったのである。学部自治を基礎に伝統重視と現状維持を事とする大学は真剣な議論をすることもなく，許認可権を持つ監督官庁である文部省の方針転換に積極的に追随したのであった。文部省トップの職にあって大学の動きを見ていた大崎仁は「基準の制約をはずしても，教育課程が実際に変化するには，10年はかかるだろう」という予測をしていたのであった。こうした予測の基盤には，「制度の弾力化に対するそれまでの大学の反応の鈍さ」が，あり「そのような判断」が存在していたのである。しかし文部省がいったん基本方針の転換を表明し

25) 阪神・淡路大震災の経験から硬直化した日本の官僚制度，縦割り行政が，大震災には全く無能であることが，証明された。「現代社会の知的システムは，『大震災』という事象の全体像を把握し，「防災」という観点から提言するには有効に組織されていない。」として小松左京は，次のような提言をしている。極度に専門化。細分化された現代の学問研究の諸領域（自然科学系，工学系，社会学系，法学系，医学系，政治学系，マスコミ・ジャーナリズム系）を統合して『総合防災学』を構築すること。
小松左京(1996)『小松左京の大震災'95』毎日新聞社
星野芳郎・早川和男編（1996）『阪神大震災が問う現代技術』技術と人間
小田実(1997)『これが人間の国か―西に異説あり』筑摩書房
日本の産業公害の原点ともいうべき水俣病に関する研究も多部門の専門家と被害の当事者である水俣病患者の相互信頼と長年の努力によってその全貌がやっと解明されつつある。
原田正純（1995）『裁かれるのは誰か』世織書房
西村肇・岡本達明（2001）『水俣病の科学』日本評論社
新しいものを生み出す基盤は，文化の多様性である。純血主義，細分化された専門領域の深いボーリング的研究は，必ずしも生産的ではない。
de Cuellar, J. P. et al.（1996）"*Our Creative Diversity : Report of the World Commision on Culture and Development*" 2 nd ed. UNESCO
極度の専門化による細分化された研究は，専門家の社会的視野狭窄を生み出し，具体的問題の解決には貢献しないのである。異質の交流，アマチュアと専門家の相互学習が不可欠である。

26) 米山喜久治（1979）「大学教育」『経済研究』（明治学院大学）No. 51，pp. 11～23
「知的創造性が枯渇し，その社会的機能が，内部から麻痺する危険性をはらむ現代日本の大学を，人類の文化の継承と創造の場として復活させるには，社会的各部門の間の交流を盛んにし，その知的作業の成果を作品として社会に提出することが，必須の条件であります。そのためには，社会の現実の諸問題を揺るぎなき事実のレベルにおいて把握し，その解決に真摯に努力している人々の声を虚心坦懐に聞くことから，スタートしなければなりません。もちろん国境と文化を超えた国際交流も不可欠であります。」
米山喜久治編(1991. 11)『現代の産業と経営―1990年度　連続講義要録』pp. 175～176　北海道大学経済学部

「実際に蓋を開けてみると，大学は雪崩をうつかのように一斉にカリキュラム改定へと走った」のであった。北海道大学でも1995年4月「教養部」が廃止されたのである。経済学部は，他の文系学部（文学，法学，教育学）とともに2000年4月に大学院講座制（大学院重点化）に移行を完了した。

全国の大学の体制順応行動は，文部当局の責任者である大崎の目からみれば，「予想を上回るこのような急速な変化は，なかなか実を結ばない一般教育改革の試み，一般教育の理念の風化，一般教育担当者の専門教育志向などが相乗して「一般教育」からの脱却を求める空気が大学に充満していたということかとも思われるが，それだけでは説明しがたい変化が大学に起きていることを感じさせるものであった。」それは「大学院重点化」と連動しており，大崎の立場からしても大学院重点化の議論は「その主張にどこか学部教育放棄のにおいがした」のであり，大学教員の「面倒な学部教育で手を焼くより，大学院の教育研究に打ち込みたい，という思いが，大学院重視論にはどことなく感じられる」のであった[27]。

こうして戦後の新制大学発足以来維持されてきた旧制高校，予科の伝統を継承した教養部や一般教育の再編成が全国の大学で一斉に行なわれることになったのである[28]。戦後日本の大学は，戦前の大学以外の教育機関（高等商業，高等工業，医学専門学校，師範学校等）を再編成し名称変更を行って6・3・3・4制の単一学校制度として発足した[29]。

27) 大崎仁(2000)『大学改革　1945～1999』p.311,312,318,345　有斐閣

28) 筒井によれば70年代前半に大衆文化が，大学にも浸透して私立大学型のカルチャーが，主流になり戦前の旧制高校の学生文化にあった教養主義「文化の幅広い享受を通して人格の完成を目指す思想，生活態度」が消滅した。現在では大学生と同世代の社会人とでは愛読雑誌の傾向を区別することは，難しい。学生の知的関心領域の大衆化が進んでいる。
筒井清忠（1998）『日本型「教養」の運命』岩波書店
いずれにせよ戦後の経済の高度成長と学生数の急増は，エリート性の消滅と大衆文化の興隆の中に大学生の社会的性質を変質させたのである。「古典」を読まなくなることから始まり，最近ではマンガやビデオ，ゲームに熱中するあまり，まとまった文章を読めない学生が急増している。「生きる力」，「ゆとり教育」というキャッチフレーズの下に実施されてきた教育政策によって戦後日本の教育は，1世代を経て多くの学生が，小中学校レベルの数学の問題さえ出来ないレベルにまで低下してしまったのである。
戸瀬信幸・西村和雄（2001）『大学生の学力を診断する』岩波新書

29) 戦後の学制改革を計画するアメリカによる基本調査については，村井実訳（1979）『アメリカ教育調査団報告書』講談社文庫
戦前の教育制度特に「旧制高校」の特権的制度が批判されて，旧制高校は戦後どこかに飛んで消えてしまった。これを実現したのは，戦前の複線型学校教育を6・3・3・4制の単線型に切り替えようとした戦前からの文教政策の意図があったのである。
アメリカ教育使節団の高等教育部門の分科会「草案」には，帝国大学の維持，強化すべきものとの議論があったが，帝国大学体制の改編が，行われ，これと連動して「旧制高校」も廃止されたのである。これは戦後の世界をリードした「画一的平等主義」の社会意識が，もたらしているものである。
旧制高校の廃止とともに学生たちが，担っていた教養主義もまた消え去る運命にあったのである。
永井道雄監修（1995）『大学はどこから来たか，どこに行くのか』第5章　土持ゲーリ法一「戦後教育改革の虚像と実像」pp.84～102　玉川大学出版部
戦後日本の新制大学の発足に際してハーバード大学がモデルとして導入された。だがそれが定着し，発展しなかったことに対する文部行政に影響力のあった天城勲からの反省がある。
「基本的な関係が日本の大学とハーバード大学の間にはある。戦後日本の大学に導入された一般教育は，当時始まったばかりのコナント総裁の構想によるハーバード・カレッジの一般教育が，典型であった。しかしながら時代的背景の理解の欠如と日本的大学の特殊な風土の中で消化不良のため，一般教育は，戦後40年たった今日でもなお，日本の大学教育の中に正当に位置づけされていない。本当はハーバードの一般教育は，ハーバード大学そのものを抜きにしては理解出来ないのである。ソルジェーニチンの言葉にならえば「ハーバード一般教育は，ハーバード一般教育なのである。」天城勲稿：日本語版への序文
E. J. Kahn Jr.／渡辺道弘訳（1984）『ハーバード—

明治以降欧米先進諸国からの技術移転中心の研究インフラストラクチャーを持つ旧制帝国大学以外の新制大学における研究インフラは脆弱であった。しかしその教員は，東京大学を頂点とする大学序列構造の中にあっても能力主義の貫徹する研究において第一級の成果を上げることをを目指していたため，形式的にも「研究第一」の方針を掲げたのであった。

大学教員の意識の底流に「教育軽視」が，存在したのである。卒業研究指導の教育こそが，大学教育であるとの意識が，「一般教育・教養教育軽視」の組織的雰囲気を生み出す一因となったといえよう。加えてその講義を受ける学生には，一般教育は，「高校教育の繰り返し」であり，知的刺激の少ないものとして受け止められたのである[30]。

学部担当に比較して劣悪な研究・教育環境に置かれた一般教育担当教員は，無意識に「一般教育否定」の気持ちがあり，これと学生の専門指向が，共振して「一般教育」の停滞を生み出したのではないだろうか。あまり語られることのないのは一般教育担当教員の「下請け意識」ではないだろうか。その研究能力において何ら変るところがないにもかかわらず，たまたま採用と配置が一般教育担当にすぎないのである。同一大学内には配置転換の機会もほとんどないのである。さらにもっと根本的なのは「自分のゼミ，研究室から独立して卒業生を社会に送りだしたい」という思いであろう。これが規制緩和を引きがねとして，雪崩をうったように一般教育担当教員を「一般教育」解体へと走らしめたのではないだろうか[31]。

1960年の日米安全保障条約改定をめぐる国民的政治論争を経た後の大学は，人間性や倫理性の探究よりも「経済価値」実現のための理論と技術の研究が，暗黙の了解の内に進められた。人間や社会のあり方についての論争を放棄したのであった。高度経済成長の成功は大学内部から教育基本法の「大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに，深く専門の学芸を教授研究し，知的道徳的及び応用能力を展開させることを目的とする。」を主体的に担うという意識を喪失せしめた。自律的市民の育成には不可欠な“知的道徳的”能力の展開という側面を，脱落させて，経済価値を能率的に実現しう

生き残る大学』YMCA出版
　問題の核心は，各大学がいかに個性的で普遍的な研究・教育を実現するのか，どのような人材を育成して社会に貢献しようとしているのか，その理念と方法，具体策である。戦後の財政貧困の中に発足した新制大学は，財政基盤を文部省の統制に依存したことと教育・研究を進めるにあたり平和憲法に基づく「教育基本法」の定める指針は，存在したものの各大学が，自らの個性を発展させるための理念，方法，具体策を持たなかったことにあるのではないか。

30) 世界で初めて青色ダイオードの開発に成功した中村修二氏は，徳島大学工学部入学後一般教育に失望して半年間登校拒否に陥っている。
中村修二（2001）『「ノーベル賞候補」は劣等生』文芸春秋12月号

31) 東京大学の非常勤講師を経験したジャーナリストの立花隆は，東京大学学生の知力の低下に続いて深刻化する日本の大学における知の解体を指摘している。
「相当ひどい答案にも一応合格点を与えることになってしまった。ゲタをはかせる作業をしながら，日本のエリートといわれる東大生の知力がこんなに低下しているようでは，日本の繁栄もそう長くはあるまいと思った。」
立花隆（1990）「立花臨時講師が見た東大生」『文芸春秋』1990年12月号
「日本の高等教育は，恐るべき質的低下と組織的解体の過程にある。」「教養部の解体という事態は，日本の高等教育に深刻な影響を及ぼしつつあります。これは日本におけるリベラル・アーツ教育の壊滅ということを意味します。」「スペシャリストの上に立つハイレベルのゼネラリストもいて，社会のあらゆるシステムは，結局ゼネラリストが動かしているのです。」「日本でも大学進学率は，45%を超えていますが，大学に入ってからの教育水準が低いから知力の総和はグンと低くなる。」「細分化による知の解体現象は，大学のような高等教育機関でこそとりわけ深刻化しております，いま進行しているリベラル・アーツつぶしは，実はそのあらわれともいえます。」
立花隆（1997）「知的亡国論」『文芸春秋』1997年9月号

る高度な専門家の育成を，意識させたのであった。こうした意識は，大学外特に卒業生を労働力として受け入れる民間企業から，職務遂行のための“即戦力”が強く求められたことに触発されたものであるといえよう。

1960年から30年間（一世代）を経て就職を意識する学生のニーズと企業ニーズに応える形で教養教育（一般教育）の比重を減少させより実学，専門教育を重視するカリキュラム改定が全国の大学で一斉に進行することとなったのである。

しかし国債の発行累積はとどまるところを知らず国家財政が困難を極める中での文部省主導の大学改革は，新たな資源配分を伴わない既存資源の工夫改善，有効利用による“改革”を目指すものである。それはとりわけ大学教員のより密度の高い研究教育活動へのエネルギーの集中を要求するものである。

しかし21世紀の困難な諸問題の解決に挑戦しうる人材育成のためには，大学教育の量的拡大にのみ対応したマスプロ教育システムでは，全く不十分であり，これまで放置されてきた教室，研究室，実験室，コンピュータ室，図書館などのハードウエアの整備が，まず実施されなければならない。それと同時に国内，国際の社会的各部門との情報，人的ネットワークの構築等の研究・教育のインフラストラクチャー整備がまず実施されなければならない[32]。このようなハードウエアとネットワークの基盤整備が，あって初めてソフトウエアたるカリキュラム改定も，実効あるものとすることが出来る。その次に必要なのは，教員の教育技術の向上のための教育訓練である。さらには事務職員の研究・教育機関のスタッフにふさわしい事務能力向上のための教育訓練である。

ハード，ソフト両面の教育環境の整備は設備投資によってほぼ解決する問題である。しかし最も困難な問題は，新しい教育カリキュラムを新しい学問観（パラダイム）の構築と連動して開発することである。

第2次大戦後既に半世紀を経て人文科学，社会科学，自然科学の各学問領域における研究の専門化と細分化は，関連領域の研究者間においてすら相互理解，コミュニケーションが困難となるまでに進展している。一つの事象を深く探究するためには専門化と細分化はやむを得ない側面が存在するであろう。しかし21世紀の地球と人類社会の直面する複雑で錯綜した諸問題の解決には，学問研究のフロンティアの研究成果を総合して問題の全体像を描き，知識や情報を自由自在に駆使しうる知的能力が求められているのである。これは部分に焦点を当てて鋭い客観的分析を中心とする近代科学の思考回路とは，逆のベクトルを持つ思考様式である。

21世紀の人類社会に貢献しうる大学教育は，狭い専門を超えた新しい学問観を基礎にして研究開発された具体的内容と方法論を持たなければならない。新しい生命論的宇宙観と学問観に基礎を持たないカリキュラムの改定は，単なるレッテルの張り替えに終始することになり，困難な時代の社会的要請にはとうてい応えることは出来ないのである[33]。

---

32) 北海道大学経済学部は，北方圏に位置する北海道の地政学的位置を生かして1996年Sweden, Göteborg大学，School of Economics and Commercial Law (HANDELS)との交流協定を締結した。さらに2001年Canada, McMaster大学School of Businessとの交流協定を締結した。

33) 宇宙と自己の存在の連続性を直観と類推によって把握する自然学確立の出発点となった記念碑的作品として
今西錦司（1941）『生物の世界』弘文堂（1972）講談社文庫版
アメリカのプラグマティズムの創始者パースは19世紀から20世紀初頭にかけての専門化する諸科学の知識を包括し連続した宇宙の認識と世界観の確立を「仮説的推論」によって探究した。彼の思考と方法については
C. S. Peirce／伊藤邦武編訳（2001）『連続性の哲学』岩波文庫

21世紀の困難な諸問題の解決に挑戦する情熱と主体性を持ち，人類の知的遺産を継承した創造的問題解決能力を持つ人材の育成こそが現代の大学教育の目標である[34]。

2．研究の目的と方法

現代の大学教育に与えられた課題である21世紀の困難な諸問題の解決に挑戦する情熱と主体性を持ち，人類の知的遺産を継承した創造的問題解決能力を持つ人材育成を，達成すべき我々がおかれた現実の研究・教育の環境は劣悪である。依然として多人数の学生が狭くそれも換気や照明が悪い教室にあふれているのである。ハイテク先進国とは名ばかりで教室や演習室，実験室における情報機器の整備は，絶望的な段階に止まっているのである[35]。

戦後一貫して量的拡大が推進されその質的水準の維持には意が用いられなかった現代日本の大学教育の根本問題は，その質的水準の確保と高度化である。それにはまず量的拡大のための方法として一般化した大教室におけるマスプロ教育の改善が，根本的な課題なのである。教室といえども大規模教室ばかりで中規模，小規模の教室が絶対的に不足しているのが，現状である。そもそも日本の大学では学生が，一人の人間としてものを考える空間が，確保されていないのが実状なのである。これは深刻に受け止めなければならない問題なのである。戦後の日本は生産力第一主義で若い世代の教育のために必要な資源配分を怠ってきたのであった。人材育成のための投資を行わない経済成長，そしてそれを主導する経済思想の貧困さを問わなければならないのである。

教員が教壇からマイクで一方的に「講義」するだけのスタイルから教員―学生，学生相互の双方のコミュニケーションが可能な教室，実験・演習室等を整備すること。加えて最先端の情報機材（視聴覚機材，パソコン等）の投入が必要なのである。

次に対象を冷徹に分析するだけでなく問題解決に向けて知識，情報を総合しうる能力を開発するためのソフトウエアたる教育方法と教材の開発が必要とされる[36]。

米山喜久治（1996）「パーティ学―生命論的宇宙観のパラダイム」
『川喜田二郎著作集第7巻』pp.577～580 中央公論社

34) 教育学者竹内洋は，デカルト・カント・ショウペンハウエルなどの観念論哲学に心酔する旧制高校に源を持つ日本の知識人の知的態度は，植民地のものであるとしている。
竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社
治安維持法（1935）の下にあっては，自らが生まれ育ち生活する日本社会の現状を客観的に把握，分析して問題解決の具体策を構想する思考様式は，ついぞ社会的に存在出来なかったのである。
知識を社会の問題解決に役立てるという発想は，極めて希薄であり，観照的でシニカルな観念の世界に自閉する知的態度が醸成されてきたのである。
「状況から主体的に問題を形成し，その問題の全体構造を把握するために適切な方法を考案し，知識を総合化出来る人間，提起した問題の解決に正々堂々と取り組んでいく勇気と情熱と責任倫理を持った人間」の育成が現代の大学の目標である。
米山喜久治（1993）『探究学序説』p.89　文眞堂
Vicoはデカルトの方法序説に始まる批判・分析を中心とする「クリティカ」よりも発見技法としての「トピカ」の重要性を指摘している。限りなく専門化され，細分化された知識を獲得するよりも，自らの全存在をかけて“問題を発見”して，その全体像を描き，さらにはその問題解決に焦点を合わせて人類の知的遺産を総合することが必要である。
G. Vico(1709)／上村・佐々木訳（1987）『学問の方法』岩波文庫

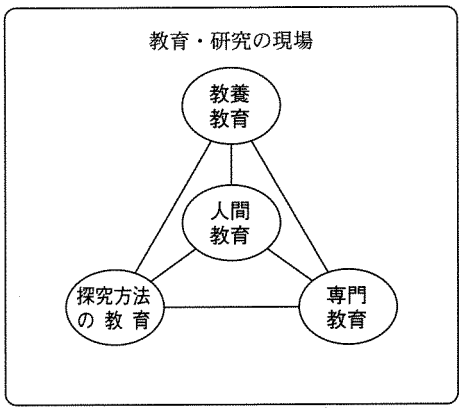
35) 現代日本では大学受験予備校の施設の方が，大学よりも優れているという社会的に倒錯した状況が，一般化している。この事実は，大学が教育機関として正当に位置づけられておらず，「学歴」付与の単なる通過点として認識されている証であろう。

36) 「観察するもの」と「観察されるもの」の支配―被支配の関係をもたらす「科学の知」は，「抽象的な普遍性によって分析的に因果律に従う現実にかかわり対象化する」特性を持っている。この弱点を克服するものとして「個々の場合や場面を重視して深層にかかわり，世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り，捉える働きをする」「臨床の知」が不可欠である。
中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』pp.128～134　岩波新書

現代日本社会は表面的には物的豊かさに溢れていながら，混迷と頽廃が深まり精神的危機に直面しているのである[37]。未来に向けて生きる学生には，自らの人生の志を自覚し，知的好奇心に基づきテーマを設定して人類の知的遺産を，主体的に学習するよう動機づける教育が必要である。特に受験生活を終えたばかりで一種の目標喪失に陥っている新入生には，新しい生きる目標の設定を促すような入門教育が，重要な意味を持っている[38]。学生には教科書の標準知識の正確な記憶に終始した学習姿勢を克服して，自らの知的関心に従い，「能力開発自己責任」の原則に基づいて学習と研鑽をスタートさせるべき知的刺激を与えることである。

同世代の人間が約半数近くも大学に進学し，主として親が授業料を支弁する現代日本にあっては「大学教育は，義務教育でない」という認識を持っている学生は，小数であると言わなければならない。入学直後の新入生には流行や世間体，はたまた単に就職を有利にするするため何となく取敢ず大学に入学し“学生をしている”意識状態からの脱却を促さなければならない。新入生に自らの知的好奇心を自覚させ学習目標の設定をなさしめるためには，従来の「自主的に学ぶ能力と意欲の高い若い人」という誤った学生像を前提にした専門的知識伝達型の教育を根本から転換しなければならないのである[39]。

第１図　知的刺激と「一仕事」の達成によって人間としての成長を促す



いわば18歳にして自らの人生の「志」を立てることを誘うことが，一般教育の最重要課題であるといえよう[40]。（第１図）

新入生は小学校以来の自己の学校生活を反省し，対象化して，そこにおいて行われてきた管理教育と長年にわたる受験勉強で強制された受け身の姿勢や思考様式を自覚しなければならないのである。それは書物や教員から定型的な知識を吸収するだけの知的姿勢であり《教科書⇒模擬試験⇒模範解答》の思考回路に閉じ込められた“受験生的”思考，偏差値思考である[41]。

習い性とまでになった“受験生”（試験の得点で自己を確認する存在）を脱して一人の人間

37）民間企業の事業再構築（リストラ）に伴う人員整理が，大規模に進んでおり，失業率は，戦後最悪の水準となっている。中高年層の自殺者も急増している。こうした中でたとえ失業をしなくても働く人々の精神衛生状態は悪く，「メンタルヘルス」問題は，重要な社会問題となっている。
川人博（1998）『過労自殺』岩波新書
社会経済生産性本部メンタルヘルス研究所『メンタルヘルス白書』（2001年版）

38）ビデオ，ゲーム，マンガなどのニューメディアと情報洪水に飲み込まれた若い世代が，仮想現実と「現実」の区別の判断力を失って従来予想されない「事件」を引き起こしている。連続幼女殺害事件，神戸須磨の小学生殺害事件等は日本人の人間性が内部から解体し始めていることを示している。
吉岡忍（2001）『M／世界の憂鬱な先端』文芸春秋社

39）北海道大学生協の学生意識調査によれば，北大生の生活と行動様式は，４人に１人が本も読まず，食事の種類や数が貧弱である。不勉強で不健康な実態が明らかにされている。
北海道大学生協の学生意識調査（1989）『北海道大学学生の生活意識調査』

40）人間存在の基底に立ち返って自らの人生を考える契機が必要とされる。
V.E.フランクル／山田・松田訳（1993）『それでも人生にイエスという』春秋社

41）米山喜久治（1993）『探究学序説』p11～17.文眞堂

としてのありのままの自分を確認すること。そのためには，試験に呪縛された学校以外の場面での社会参加（アルバイトやボランティア活動など）の経験を積むことが不可欠であろう。またこのような活動を単に思い付きに終わらせてはならない，そのためには自らが触れた経験世界から直接学ぶための方法論の修得が不可欠であることを知らなければならない。みずみずしい感性と知的好奇心に加えてこの探究の方法論があれば社会的各部門で活躍する多様な人々と直接交流することから無限の知恵を学ぶことが出来るのである。

特に新入生にはまず“科学”とは，物理や化学のような自然現象や物質の特性を解明する“自然科学”だけではなく，我々が生きること自体を研究対象にする“人文科学”と生活している社会それ自体を研究対象にする“社会科学”が，存在することを正確に理解させる必要がある。1960年代後半に提起された新しい科学の分類枠組みとしては，「実験科学」，「書斎科学」，「野外科学」が存在する[42]。さらに1970年代以降コンピュータの発達によって「情報科学」が，誕生し，この情報科学は，他の科学の分野に強い影響を与えるだけでなく，伝統的な諸科学を包摂する勢いで成長，発展しつつある[43]。

社会科学系の学部を持つ大学ではこの“社会を科学する者”としての社会科学者に不可決の知的態度や思考方法，方法論，基礎概念の修得のために4年間のコースが，設けられているのである[44]。

ここでいう社会科学者が修得すべき知的生産の技術と技は，次のような一連の手順から構成されている。すなわち自分の経験を記録し，対象化，客観化すること。現場の社会事象を観察，記録すること。フィールドワークと情報探検によって得られたデータ，情報を整理，ファイリングし，データ・ベースを構築すること。関連するデータを統合して問題の全体像を描き，仮説を発想すること。具体的解決策を構想し，制約条件の下で生きる現場で問題解決を実施して，仮説を検証すること。さらにその結果の報告書作成と発表を行うことである。

1つの社会的事象やデータを多面的，多角的にかつ共感をもって把握，検討し，鮮明なビジョンによって問題解決を構想するしなやかな思考力を持つこと。さらに責任倫理をもって問題解決を実践する行動力こそ21世紀に生きる人間の持つべき素養と知的能力であろう。社会科学的知識と人間として生きる知恵は，人文科学，自然科学的知識とともに問題解決の現場に

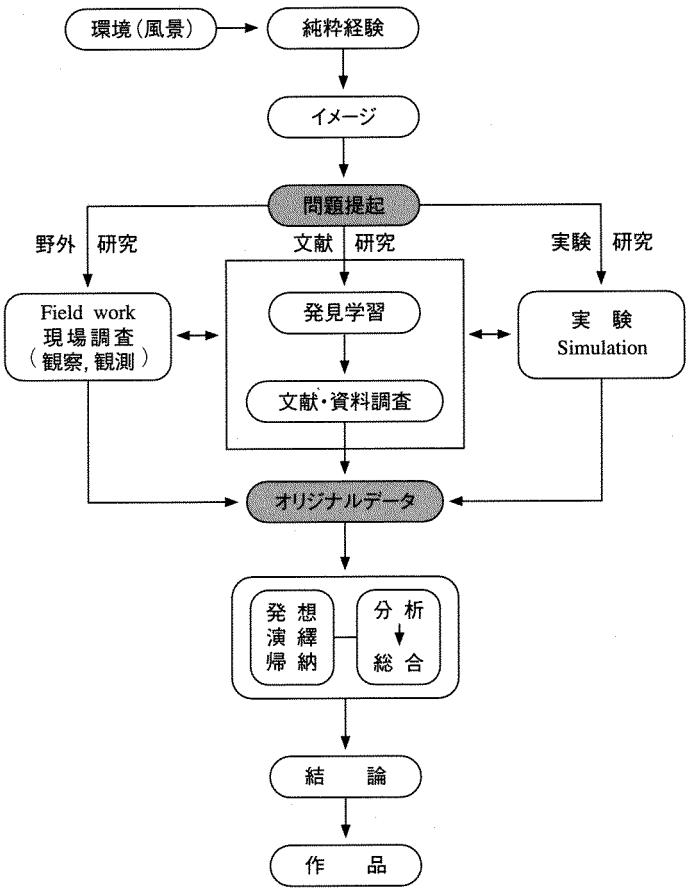
---

42) 川喜田二郎(1967)「野外科学の提唱」『自由』Vol. 9. No. 5, pp. 10～21
同（1973)『野外科学の方法』中公新書　所収

43) 統計学者北川敏男は，情報に関して「切断⇒自己保存⇒部分集合⇒階層化⇒システム化⇒流れの導入」ステップが存在することを指摘している。また情報理論に営存空間，創造空間という新しい次元を含むモデルを構想している。北川は，荘子の「斉物論編」からヒントを得て，認識論にまで足を踏み込み，経営における「営み」の概念と哲学の新領域を切り開くことになった基本概念である「実存」の「存」の概念を統合して，新しい「営存」という次元を導入している。そこで情報学の観点からみて次の3点を問題として提起している。
1．切断の原理の適用には，現実には限界がある。
2．階層化の原理が有効でない場面がありうる。
3．選択の原理は必ずしも自明でなく，また一意的に決まるとは限らず，時にはこの原理の適用をさしひかえるべきである。
北川敏男（1969)『情報学の論理—制御から創造への新次元』pp. 246～270 講談社現代新書
このように情報科学は，単にコンピュータによる伝統的諸科学の再編成ばかりではなく，人間存在と認識に深く係っているのである。特に1990年代以降人間の感覚にも対応した3次元CGは，仮想現実の世界を拡大し，人間の認識と存在を根底から問うまでになっているのである。

44) 「充実しておもしろい学問」という考えは，1975年から在任した明治学院大学在任中のゼミナール学生指導の基本理念であった。
米山喜久治(1978)「大学教育—現場からの一試論」『経済学研究』（明治学院大学）
この考えは継続しており『探究学序説』(1993年文眞堂）としてまとめることになった。「はじめに」においてその意図を具体的に展開した。

第2図　研究の3つのアプローチ



出所：米山 (1993)『探究学序説』p.161

おいて統合されなければならないのである。

大学の使命は，このような素養と知的能力を持つ人材の育成を通して広く人類社会に貢献することである。そのためには具体的な能力開発プログラムによる大学教育の実践が求められているのである。

以上のような問題意識に従って「一般教育の現状と課題」を1996年4月から8月まで実施した北海道大学経済学部第1学年を対象とする『現代の経済Ⅰ』(北海道大学旧教養部講義棟　E209号教室) を具体的事例として検討することにしたい。

1) 所定書式に定められた学生用シラバスの提示 [講義のねらい，授業内容，key word，成績評価の方法]

2) 学習・研究活動の探究過程を示すフローチャート(枠組み)の提示と説明。(第2図) 講義内容の理解を助けるための資料の配付[45]。

3) ビデオ，スライド，OHP等の視聴覚機材の活用により板書をミニマムにし，時間を有効に活用する。

45)「情報社会」,「創造性」,「産業論」,「雇用問題」,「人事問題」に関する文献リスト (82冊) B4版　1枚配布

4）大教室でのマスプロ講義における教員から学生への一方通行の情報，知識の伝達（コミュニケーション）を改善するための質問時間の設定。
5）提出された課題レポートの評価，コメントを加えての返却。
6）また受講学生集団全体の傾向を明らかにするために提出されたレポートやアンケートの集計結果のフィードバックと情報の共有化。
7）社会的各部門で活躍中の実務家をゲスト・スピーカーとして招聘して，ゲストの経験から直接学ぶ機会を設ける[46]。
8）ゲストのスピーチに対してコメントを提出する。ゲストへのコメントのフィードバックとゲストから学生に全体の講評を含むフィードバックを行なう。
9）講義全体に関する学生の評価を行なう。その結果の公表，フィードバック。

以上のような試みを行ない，多様な刺激によって学生が，知識を伝達される客体から脱して自主的に学習する人間としての主体性の獲得を促すのが，新入生に向けた第 1 学期「現代の経済Ⅰ」の目的である[47]。

3．第1学年科目『現代の経済Ⅰ』の具体的進め方

1）シラバス

1996 年度北海道大学経済学部 1 年生に向けて開講された『現代の経済Ⅰ』の講義要録に記載されたは内容は次の通りである。

［本講義のねらい］

受験体制に組み込まれた遥に遠い小学時代にスタートした『受験生的思考』（標準教科書→練習問題→模範回答）を克服し，21 世紀に生きるための創造的問題解決能力の向上に資することにある。受験生的思考とは，必ず解ける問題の模範回答を出来るだけ能率的に記憶して，与えられた問題に対して出来るだけ高速度で『記憶』から呼び出すことにのみ習熟した思考様式である。第 2 次世界大戦後の東西冷戦の終結により世界の政治，経済，軍事の枠組みが揺らぎ，産業開発，人口爆発，地域紛争などに環境の汚染と破壊は，地球規模に達しており，問題は複雑化かつ深刻化している。

諸君は一人の人間として自らの人生を切り開

46）高校生を主たる読者層として想定されている『岩波ジュニア新書』も最近では大学 1 年生，2 年生に読まれることが多いといわれている。岩波新書，中公新書，講談社現代新書は，当該ジャンルの概説書であり，新しい知的領域への優れた入門書である。しかしこうした「新書」も新入生が，手に取って読むにはかなりエネルギーがいるようである。高校時代に受験参考書と自主的に読むものといえばマンガにしか触れて来なかった人々には，たとえ 200 ページの新書でも重いのであり，単純に一つの“解答”が，明示されない文章を，自分でなぞって思考することは，“しんどい”，“面倒くさい”ことなのである。
　学外の専門家から当該領域に関して直接話を聞くことによって倦んだ精神状態から脱出する契機をつかむこと，ゲストの人間的存在が，疲れた精神状態にインパクトを与えてくれることを期待しているのである。

47）デカルト以来の近代科学は，分析を中心に発達してきた。人間と社会の全体像及び個性を把握するのでなければ，現代の諸問題の解決は困難である。近代の伝統的な学問体系に依存する「専門主義」と「業績主義」の大学の学問は，複雑，多面的，多重構造を持つ問題の把握と解決には無力であるとさえいえよう。物理学者竹内均のいう「第三世代の学問」の方法論に基づいた新しい科学の開拓が必要である。竹内によれば「地球科学」の発展は，三つの世代に分けられる。
第 1 世代：自然を調べ，記述し，分類する
第 2 世代：それらの結果を分析し，演繹する
第 3 世代：手にはいるかぎりのデータをもとにした「総合」
竹内均／上山春平（1977）『第三世代の学問』pp. 4～5　中公新書
　具体的な現場の問題解決の場においては，大学で営まれている学問的営為の諸科学の成果（知的遺産）は，統合されなければならない。「野外科学」，「現場の科学」，「臨床の知」，「フィールドワークの知」の開拓が必要である。

くために直面する諸問題を解決して行かなければならず，所属するであろう組織（企業）も日本社会も，激変する国際環境に創造的に適応するのでなければ存続を許されなくなっている。

大学もまた21世紀に活躍出来る人材を育て，諸問題の解決のための基本理念，方法論，具体策を開発しなければならない。

自らの経験（手）と問題意識（頭）に従い，知的探検（フィールドワーク，文献研究）により，問題を発見し，仮説を発想し，その本質を解明すること。複数の問題解決の具体策を構想し，制約条件の下で実行可能解を探究し，倫理性を守りながら勇気をもって解決策を実施する思考様式と人間性を錬磨することを目的とする。

［授業内容］

自分の生活の場で起こっている諸問題を手掛かりにして，現代日本の産業社会が，抱える諸問題を，目の位置を移動（虫，魚，人間，鳥，人工衛星）し，観察し，考察する。

第 1 部　問題提起

第 2 部　現状把握と問題点の解決（テーマ別にゲスト・スピーカーの招聘）

第 3 部　まとめ

《Key word》

原体験，原風景，志，フィールドワーク，臨床，データ，文献探索，問題発見，意思決定，仮説，発想，手で考える，環境，市場，企業，生産，流通，消費，廃棄，分解，システム，管理，労働，生活

2）充実しておもしろい学問をやろう

大学での勉学のスタートに際してモットーとすべきこととして説明をした講義の要約文章「新入生の皆さんへ―充実しておもしろい学問をやろう！」

北海道大学経済学部へのご入学おめでとうございます。長い受験生活にやっと終止符を打って今日からの講義に参加できた自らの幸運を思い，これまでの生活を支えてくれた両親や近しい方々に感謝の気持ちを忘れないで頂きたいと思います。遠く小学時代に受験体制に組み込まれて以来自分が興味を抱くことに取り組む余裕を与えられず，“それは大学に入学してから考えればいい”と自らに言い聞かせて今日まできたのではないでしょうか。今まさに皆さんは大学のキャンパスに立ち，それを実現する時を迎えたのです。だが皆さんは受験から開放された喜びと同時に言い知れぬ疲れを感じているのではないでしょうか。あたかも深海から急に浮上したように精神面における「潜水病」にかかってしまっているのではないでしょうか。

大学は一つの社会制度ですから授業時間や単位の取り方，進級などはすべてルールに従って運営されます。北海道大学の学生として生活をスムーズにするにはルールを最低限守らなければなりません。でもその後は全て自己の責任において行われます。全ての手続きを終えた後は，ゆっくりと自分を見つめ直して頂きたいのです。表題に掲げた“充実しておもしろい学問”は，ただ単に講義に出席することで得ることは出来ません。

“学問をおもしろく”するには，まず自分がどんなことに関心があるのかを自覚する必要があります。これは誰かに教えてもらうことが出来ないことなのです。そのためには幼い頃からの自分の経験を振り返ることです。自分の心の叫び声に忠実に耳を傾けることです。他人の評価を気にすることもなく夢中になって取り組み，おもしろかったことは何だったかを思い出してみるとよいのです。心の底からわき上がってくる思い（知的好奇心）を基盤にして自分が生きていく新しい世界を広げようとする時に手掛かりになるのが，人類の知的遺産としての「学問」なのです。

同じ富士山でも駿河湾から見る姿と甲府盆地から見る姿は違います。学問も同じように人間，社会，自然，宇宙のどのどの部分に中心的

関心を持つのか，どういう位置から観るのかによって多様な専門領域に別れています。“億光年”を単位とする大宇宙銀河系にある水の惑星，この地球上に我々はただ一度だけの人生を与えられているのです。その舞台を詳しく知り，生きる意味を発見し，新しい価値を創造していこうとする時，学問は本来のおもしろさを示してくれるものといえましょう。

1980年代には戦後の高度経済成長によって日本は，経済大国と呼ばれるようになりました。ベルリンの壁の崩壊に続くソ連の崩壊による東西冷戦の終結は，日本を取り巻く国際環境を根本的に変化させてしまいました。70年代には公害問題が，局地的に激発しましたが，90年代の環境の悪化は，地球規模に拡大深刻の度を深めています。21世紀を目前にして日本は今大きな転換期にあります。明治政府の悲願であった「欧米先進諸国に追いつき追い越せ」を目的として構築された社会システムは，1世紀以上も作動して今日では完全に機能不全に陥っています。

皆さんは21世紀に大学を卒業して社会人として活躍されることになります。皆さんが取り組まなければならない諸問題は，相互に関連しますます複雑化し，さらには変化のスピードが速く，簡単に解決することが困難になりつつあります。人類の直面する諸問題を解決するための普遍的な理念，方法論，構想力，具体的解決策，倫理性，リーダーシップなどが，問われています。

あと数年で21世紀となる現代は，「大転換」の時代です。大転換，青春そして学問が，激動の現代を生きる若い皆さんの生活の核心であります。

明治政府に求められてアメリカから札幌農学校に赴任したW.クラーク博士は，札幌を去って帰国の途につくに際して学生達に“Boys be ambitious!!”というメッセージを残しました。クラーク博士が，学長を務めたマサチュセッツ農科大学（現マサチュセッツ州立大学アマースト校）の卒業生で，1983年に来学したR.H.ゲスト博士（ダートマス大学アモスタック経営大学院名誉教授）の北海道大学学生に贈る新しいメッセージは，“Boys work hard, Girls be ambitious”であります。

3）新しい生活の目標の設定

入学直後の新入生の肉体的，精神的健康状態は，一般的にはあまり優れたものではないといえよう。運動不足が基調としてあり，長年の受験生活で蓄積した言い知れぬ深い疲れをどこかに溜め込んでいると考えられる。筆者は新入生の入学手続きの説明，生活ガイダンスと学生証の交付の職務を担当したのであった。1人1人名前を呼んで，確認の上，学生証を交付したのである。しかし自分の名前を呼ばれて「はい」と返事をした学生が皆無であったのには，驚かざるを得なかった。自分の名前を呼ばれても誰も返答の声を発しない若い学生達で一杯の教室は，異様な雰囲気である。戦時下の「絶滅収容所」が，かくこそありしかと思わしめるものであった。姓名を呼ばれても声を出して反応出来ない彼らの精神は，一種の放心状態にあることが推測されるのである。

大学合格を唯一の目標とする緊張した生活から一応開放されて“まずは一休み”を取っているのが，彼らの姿ではないだろうか。自分が何を大学で学びたいのかを不問にしたまま無事に入学を果たしたものの，入学後の目標は全くの白紙のままであると思われる。それゆえ新入生には，新しい知識の伝達よりもまずは今後の生活と学習の目標の設定を自ら行うことを促すことが必要なのである。

このため第1表に示すような4年間の学生生活の活動計画表を配付した。これには以下のような主たる活動項目が記載されており，自らの関心と希望，アイデアと行動力によって充実した学生生活を送ることの重要性を説明した。

4年間在学期間中の講義（「必修科目」，「選択科目」）の履修には，経済学科，経営学科の

第1表　経済学部学生生活の基本計画

	1年次	2年次	3年次	4年次
講義 必修科目 選択科目				
ゼミナール				
卒業研究				
知的生産の技術 （探究学）				
パソコン				
外国語				
スポーツ				
自動車運転免許				
Cooking				
Hobby				
Volunteer				
アルバイト				
就職活動				
留学				
その他				

コース別の科目があること，外国語の単位未履修では3年次に進級できないことを説明した。これまでの経験として出席日数が，不足して「外国語」の単位を取得出来ずに，進級出来ない者が，複数名出ているのである。まずは必要条件をミニマム満たすことが，進級と卒業のためには肝要なのである。

ゼミナール所属については，自分の知的関心領域に最も近い指導教官を見つける努力をすべきことを，次のような内容を持つ文章によって説明をした。

「諸君が経済学部における勉学を終えて社会に出る頃には，諸君の祖父や父の世代が享受出来た終身雇用も期待出来ない雇用条件の下に就職をしていかなければなりません。諸君は自分にあった職業に就きたいと願っていると思いますが，これはじっとしていて実現できるものではありません。自分が何をやりたいのか，また何が出来るのかを明確にするのでなければ望むことは出来ないのではないでしょうか。そのためには経済学部に在学する間に自らの根源的な知的好奇心に基づいた研鑽が必要になります。誰かにどうすればいいのかを質問するのではなく，自分が本当に心の底から面白いと思うこと，やってみたいことを発見し，自覚しなければなりません。20世紀も余すところ後数年となった現代は，大転換の時代です。大転換，青春そして学問が，今日を生きる若い諸君の生活の核心であります。経済学部は，30数名のスタッフ（教授，助教授）を抱えており，学生数も1学年200余名と首都圏のマンモス大学に比較して規模も小さく恵まれております。札幌農学校以来の遺産を継承する北海道大学は，全国有数の緑豊かな広いキャンパスを持っており，静かで諸君の思索には最適の場となっています。自分が研究したいテーマにぴったりのスタッフは，見つからないかもしれませんが，近い領域を専門とするスタッフを必ず見つけることが，出来ると思います。

卒業後は社会人として活躍され，持てる能力の試される日々を過ごされることになります。あの時あそこで人間的にも知的にも修業したため今日の自分があるのだと自信と誇りをもって学生時代を振り返ることが出来るような，そういう充実した日々を送ってもらいたいと念じております。学生時代に自らのライフワークのテーマを見つけて頂きたいと思います。」

ゼミナール選択に対してどのような考え方で臨むべきかについて韓国からの留学生で1996年3月修士課程を修了した閔鉉晳氏からのメッセージを印刷配布した。同君からのメッセージは，次のようなものであった。

「春から3年生，4年生，社会人となる皆さんに，私自身の反省に基づくいくつかのアドバイスを送りたいと思う。まず，皆さん！基本的には楽しくゼミ活動をすることが，最も大切なことであると思う。大学は皆さんが社会に進出する前にさまざまな情報を与える場で，皆さんがいろいろなところへ走らないとそういう情報は，なかなか手に入らないと思う。一生懸命走って下さい。

大学を料理に比較すると，大学の授業やゼミは1つのMENUであり，おいしいものは自分

で選択して食べて下さい。誰かの指示で食べると消化出来ないと思う。自由で何でもいいですからやってみて下さい。そこで自分の能力を確かめて社会に何が貢献出来るか，というような大きな夢を持って人生の目的や目標を設計して下さい。

私のアメリカ・ウィスコンシン大学での4年間を振り返ってみますと，積極的に挑戦していなかったと思う。北海道大学大学院の修士課程の2年間を終えて，家庭を持ってようやく自分の人生をどのようにすべきかわかりました。皆さんは2年間のゼミ活動にぜひ，自分なりの答を見つけて下さい。そのためには目的や問題意識を持ったゼミ生活を送ることが必要なのではないでしょうか。皆さん頑張って下さい。

自己開発の例

1．Comminication Skill（外国語＋日本語）
2．積極的に参加する
3．人をrespectする

以上の3つの例は，私が考えている最も重要なPointで，私も皆さんと一緒に頑張って行きたいと思う。

“Open Your Eyes and Mind! Good Luck to You All!”」

次に卒業研究をはじめとして創造的な一仕事の達成のための方法論としての「探究の方法，知的生産の方法」の修得が必要であること。さらにはまた情報化時代の道具である「情報技術（パソコン等）」，異文化コミュニケーションのための「外国語」の修得が新しい時代の「読み書き，そろばん」の意味を持っているのである。趣味(Hobby)としての「音楽（楽器）」，「読書」「スポーツ」「料理」，「舞踊」などは豊かな個性を磨くためにも学生時代から時間とエネルギーと資金の投入が不可欠である。

自前で長距離移動を行ない行動範囲を広げるためにも将来の職業生活にも「自動車運転免許及びその他のライセンス」の取得は，欠かせないものとなっている。

経済価値のみで結びついた人間関係以外の人間的交流を行うためには，「ボランティア活動」も社会参加の重要なチャンネルとしての意義が大きくなっている。国内での活動だけでなく外国研究（外国語修得，異文化適応能力向上，専門知識の習得）を目指す人は交換留学制度による留学（アメリカ，韓国，スウェーデン）が有効であろう。さらには自主的なプログラムによる海外留学，研修，旅行等をどのように時間的制約，経済的制約の下に達成するかを慎重に計画し，実行する必要があるだろう。

「アルバイト」も臨時の出費を補填するために行なうだけでなく，一つの社会参加の機会であることを自覚すること。経営学，経済学の基礎意識があれば，担当職務の遂行を通しての多様な実践から学ぶことが出来るのである。

大学生活の締めくくりとして卒業後の人生設計（キャリア・プラン）とその実現のための職業選択を行なわなければならない。自らの能力と適性を生かして将来の職業生活を切り開くための就職活動を避けて通ることは出来ないのである。

以上が4年間の学生生活の主要な学習，実践課題であるといえよう。各自の関心に従って自分なりのアプローチで，課題をゆっくりと時間をかけて熟考した後，決断したら若いエネルギーで行動に移すことが求められているのである。

入学後の解放感と浮かれたお祭り気分を脱して早く大学の環境と生活に慣れること，自らの次の目標を見つけ出すための1歩を踏み出すことが求められているのである。

新入生には学生生活の新しい目標を形成することと自分なりのシナリオを書くことがまずなすべき仕事であることを指摘した。充実した学生生活は，まず「挨拶から始まる」ことを強調した。同じクラスになったり同じ講義に出席しているもの同士は気軽に挨拶をしたり話をする心構えが，このキャンパスでの生活を豊かにす

第2表　平成7年度　卒業者の就職状況産業別内訳

北海道大学経済学部
平成8年3月31日現在

産業区分	決定者数
鉱業	1
石油資源開発	1
建設	11(1)
安藤建設	1
五洋建設	2
伊藤組土建	1
旭化成ホームズ	3
千代田化工建設	1
スウェデンハウス	1(1)
日本舗道	1
清水建設	1
食料・飲料	11(2)
アサヒビール	1
北海道コカ・コーラボトリング	1
国分	1
江崎グリコ	1
ロッテリア	1
千秋庵製菓	1
日本甜菜製糖	2
山崎製パン	1
雪印乳業	1(1)
日光総業	1(1)
繊維	1(1)
東レ	1(1)
出版・印刷	4(1)
ベネッセ・コーポレーション	2
大日本印刷	1
北海道新聞社	1(1)
化学	1
日産化学工業	1
鉄鋼	1
日本鋼管	1
一般機械器具	5
松下電器産業	1
栗田工業	1
三洋工業	1
古河電気工業	1
石川島播磨重工業	1
電気機械器具	3
日立製作所	2
三菱電機	1

産業区分	決定者数
輸送用機械器具	6
いすず自動車	1
三菱自動車工業	1
三菱重工業	1
日本電装	1
トヨタ自動車	1
本田技研工業	1
その他の製造業	3
東陶機器	2
ブリヂストン	1
電気・ガス	4
北海道電力	1
東北電力	1
東京電力	1
中部電力	1
運輸	6(1)
日本航空	1
全日本空輸	1
ANAスカイパル	1(1)
JR北海道	1
JR西日本	1
名古屋鉄道	1
通信	13(5)
NTT	9(2)
日本テレコム	1
NTTドコモ	2(2)
日本国際通信	1(1)
卸売	7(1)
三菱商事	1
三井物産	1
ニチメン	2
第一実業	1
パレオ	1
オンワード樫山	1(1)
小売	8(5)
イトーヨーカ堂	2(1)
丸井今井	2(1)
札幌トヨタ	1(1)
テーオー小笠原	1
セブン・イレブン	1(1)
飯島商店	1(1)

産業区分	決定者数
政府系金融機関	4
国民金融公庫	1
農林中央金庫	1
商工中央金庫	1
中小企業金融公庫	1
都市銀行	12(2)
北海道拓殖銀行	4(1)
富士銀行	1
あさひ銀行	1
三和銀行	2
東京三菱銀行	1
大和銀行	1(1)
日本興行銀行	1
北陸銀行	1
地方銀行	6(1)
北洋銀行	5(1)
第四銀行	1
信託銀行	1
東洋信託銀行	1
証券	3
大和証券	1
野村証券	1
国際証券	1
生命保険	7
安田生命保険	1
大同生命保険	2
日本生命保険	1
住友生命保険	1
明治生命保険	1
富国生命保険	1
損害保険	7
東京海上火災保険	2
日新火災海上保険	1
大東京火災海上保険	1
日動火災海上保険	1
興亜火災海上保険	1
日本火災海上保険	1
その他の金融	5(1)
武富士	1
エヌ・テイ・レース	1
北海道信用農業協同組合連合会	1
甲南保険センター	1
日本アジア投資	1(1)

産業区分	決定者数
不動産	1
住宅・都市整備公団	1
サービス	21(7)
日本放送協会	1
北海道放送	1(1)
札幌テレビ放送	1
名古屋テレビ	1
ホテル・アーサー札幌	1(1)
東京リース	1
トランスコスモス	2(2)
北海道テクシス	1(1)
CSK北海道システム	1
システムフロンテア	1
日立ソフトウエアエンジニアリング	1
協同広告社	1
ビーコンソフトウエアシステム	1
大和実業	1(1)
ホクレン農業協同組合連合会	1
吉岡税務会計事務所	1
日本中央競馬会	1
北海道市町村共済組合	1
電通	1
財団法人仙台市農業福祉事業団	1(1)
国家公務	11(4)
東京都福祉局	1
労働省職業安定課	1
北海道開発局	1
北海道大学	1(1)
東京国税局	1(1)
札幌国税局	3
函館税関	2(1)
静岡大学	1(1)
地方公務	11(3)
北海道	1
札幌市	3
江別市	1
岩見沢市	1
函館市	1(1)
秋田市	1
横浜市	1
刈谷市	1(1)
岡山市	1(1)

計174(35)

備考　（ ）は女子で内数

る必須の条件であることを繰り返し述べたのである。それを理解してもらう事例として60年の伝統を持つ東京都内の寮生600名の大学寮でも，友人ゼロという事態も発生しており，学生相互のコミュニケーション能力の低下が，深刻な状況にあることをOHPで示して注意を喚起したのである[48]。

新しい目標の設定に向けた動機づけは，講義で一般的な内容の説明をしてもあまり有効ではないことはいうまでもないであろう。

そこで同じ大学，学部の卒業生が，どのような学生時代を送り人生の選択をして就職先を決定したのか，その経験に学ぶことを試みたのである。まずは経済学部卒業生の就職状況に関する統計的資料（1995年，平成7年度174名（内女子35名））産業別及び産業別内訳（企業名）一覧表を配付して，全体的な傾向を理解する手掛かりとした。第2次産業への就職者が比較的少なく，第3次産業への就職者の比率が高いことが明らかである。（第2表）

次に現在既に学部を卒業して社会で活躍しているOBから学生生活を振り返り，若い学生諸君に何をなすべきかを，“卒業生からのメッセージ”としてよせてもらった文章を資料として配付した。（鉢呂建市氏，飛世政良氏，桜井淳氏，船越克人氏，十河直幸氏，岩脇由樹氏，阿部真也氏，笠原淑香氏，関鉉晢氏の文章，B4版　3枚綴り）同じキャンパスにかつて学んだ先輩達の成功と失敗の経験に直接学ぶことは，教官が，百の言葉を弄するよりも理解が容易であると考えられるからである。大学入学直後から自らの人生のキャリア・プランを考えることが重要であることを具体的に先輩たちの実績から学ぶための素材を提供することを目的としたのであった。

鉢呂建市氏(昭和56年卒，北海道電力勤務)からは，「学生時代できが悪かった自分への反省も込めて，これからの4年間を有意義なものとし，立派な社会人になってもらいたいとの願いからアドバイスめいた教訓を書いてみます。

(1)とにかく学生時代に何か集中的・徹底的に夢中になること
(2)教養時代のクラスメイトなどととにかく多くの友人を持つこと
(3)何事にもチャレンジ精神を
(4)常に何かに対して問題意識を持つこと
(5)企業中心の論理と市民理論優先の時代へ
(6)英語も含めた語学力の研鑽」

という文章が寄せられた。

飛世政良氏(昭和56年卒，北海道電力勤務)からは，学生時代にやっておくべきこととして次のようなメッセージが寄せられた。

(1)自分自身の頭でよく考えること
(2)常識を身につけること
(3)正しいモラルを身につけること
(4)謙虚に人のいうことを聴く姿勢を身につけること
(5)友人を多くつくるべし

---

48) 朝日新聞連載記事「傷つくのがこわい—やさしさ世代の若者たち」(No. 1，寮生600人友人ゼロ)『朝日新聞1996年4月3日号』
大学キャンパス内における人間関係の希薄化が，進んでおり，自分から誰かに話しかけないと1日中誰とも会話しないで過ごしてしまう学生も多数現れており，これが自室に引きこもる遠因となっている。講義への出席が絶対的に不足し，語学の単位をその代表にして，未修得のため進級が出来なくなってしまうのである。現代学生の社会，環境等への無関心について精神医学者笠原嘉は，「スチューデント・アパシー」と規定している。
笠原嘉(1977)『青年期』pp.69～124　中央公論社
中島梓によれば現代日本社会は，「コミュニケーション不全症候群」に陥っている。その特徴は，
1．他人のことが考えられない
2．知り合いになるとそれがまったく変ってしまう。つまり自分の視野に入ってくる人間しか「人間」として認められない
3．さまざまな不適応の形があるが，基本的にはそれはすべて人間関係に対する適応過剰ないしは適応不能
中島梓(1991)『コミュニケーション不全症候群』pp.29～50　筑摩書房

(6)何かに熱い心を燃やし打ち込むこと
(7)英語とコンピュータは使えるレベル迄習得しておくこと
(8)法律についても勉強しておくことが望ましい
(9)学歴社会は変質し，どんな能力があるかが問われる企業社会が到来する

何にでもtryするアグレッシュブな人材を目指して大学4年間を有効に過ごして頂きたい。」と。

これらの先輩達からのメッセージを受け止めて自らのキャリア・プランの基礎を創り出すため「学生生活の基本計画」の1学年の欄への記入を宿題として課したのである。

4．問題発見・問題解決―受験生的思考からの脱却

(i)日本社会のイメージ

研究のアプローチに従い自らの原風景を基底にして純粋経験によってある事象にどのような「イメージ」を持つかが，研究活動を推進する上において重要な意味を持っていること。従来理性と論理による思考が，研究活動の中心であると考えられてきたが，これだけでは不十分なのである。これから学習し，研究しようとしている「日本社会」についてこれまでの生活経験によってどのようなイメージを持つかを「平和，自由，退廃などの16項目によって(はい，いいえ)で質問をして，その結果を集計したものが，第3図である。[49]

18歳で入学した学生は，1978年生まれであり，日本の高度経済成長の達成により実現された物的に「豊かな社会」の申し子ともいうべき世代である。「平和」(92.8%)で「豊富」(77.8%)で「安定」(74.5%)している一方受験生活の経験が影響していると考えられるが，「制約」(75.2%)のイメージを抱いている。社会を「冷たい」(63.4%)と感じており競争社会の影響を受けていると思われる。

こうした日本社会のイメージが，正確に日本社会の現実を反映しているものなのか，マスコミ等によって作られ，伝播されているものなのかどうかを自ら検証してみるのがこの講義の目的の1つである。

(ii)大学・短大進学率の考察

解が必ず1つあるように設計された入試問題を解くことに習熟することが，入学試験に合格する必須の条件となっている。しかし受験技術を磨くことは，「必ず解は1つ」という思考様式に過剰適応して受験生的思考に陥ることを意味している。新入生に課せられた課題は，いかにしてこうした単純な思考様式から脱して，「事実を偏見なく見つめその本質を探究し，事実に即して問題解決を考える」思考様式を身に付けることである。

そこで自分たちと同じ世代の人々が，「大学進学・短大進学」を目指した行動の結果を考察することにした。文部省の統計データからいかに多面的に問題を把握するかの演習課題を出すことにした。

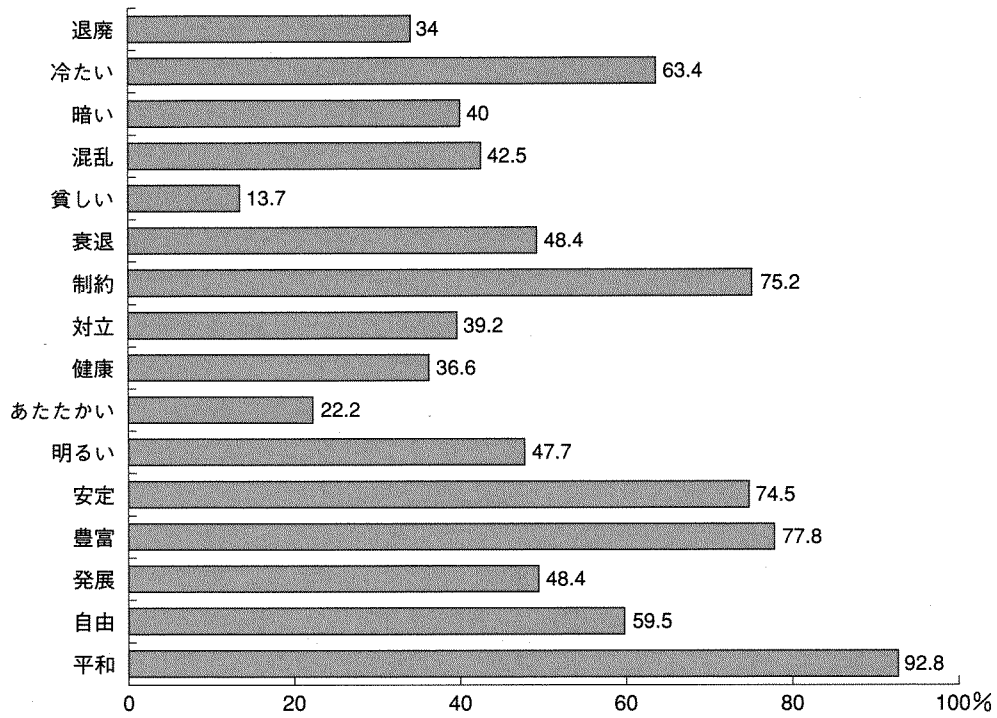
文部省統計によれば1995年4月の大学・短大進学率は，45.2%となっている[50]。このデータをどれだけ多様な観点から考察することが出来るか。第4図に示すようなB4版図表によって自分で点検してみる演習である[51]。オリジナル・データ(1995年度大学・短大進学率)から第1ステップ(7ブロック)⇒第2ステップ(17ブロック)⇒第3ステップ(22ブロック)第4ステップ(19ブロック)を経て

49) 調査項目は次の調査と同じである。東大広報委員会(1982)『学内広報』No.583

50) 文部省(1996)『文部省統計要覧』(平成8年版)大蔵省印刷局

51) Mac用ソフト「Inspiration」で作図したもの。

第3図　日本社会に対するイメージ（N＝153）1996.4.



どれだけ多様な思考を発展させることが出来るか宿題として課して提出を求めたのである。

教室での講義時間中に第3表に示すようなチェックリストである「問題と視点(思考の軸，切断面)を，配付して自己点検の作業を行った。各自のリストの提出を求め学生全員の傾向を把握することを試みた。その結果は，第5図に示す通りであり，設定した25の思考軸に対して男子平均11.3軸，女子平均12.5軸という結果が出た。

また設定した思考軸をどれだけ使ってデータを考察したのかを，レーダーチャートで示せば第6図に示す通りである。

このチャートによれば横断面(Cross Section)，生死(Life/Death)，ストック・フロー(Stock/Flow)，需要と供給(Demand/Supply)，内面と外側(Inside/Outside)，ホストとビジター(Host/Visitor)，上部と下部(Top/Bottom)，

第3表　発散思考によるチェックシート（集計表）

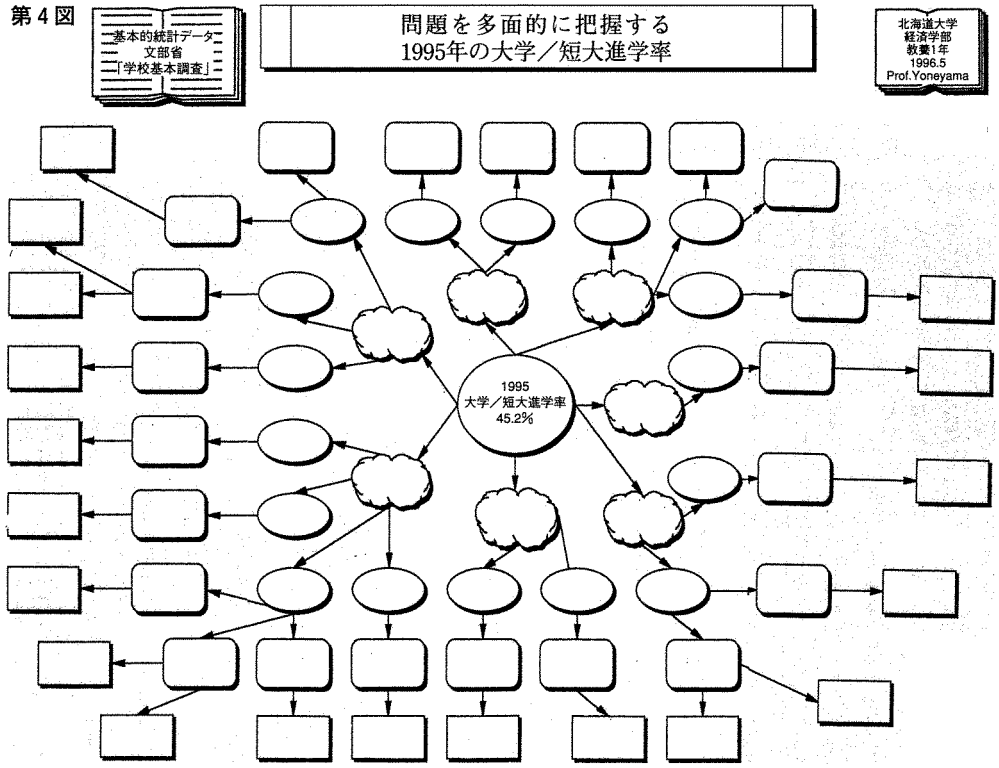
1996. 7. 5

	男	女	計	%
条件満足	94 (73.4%)	30 (85.7%)	124	76.1
一部不備	14 (10.9%)	4 (11.4%)	18	11.0
基本的な欠陥	20 (15.6%)	1 (2.6%)	21	12.9
計	128	35	163	100

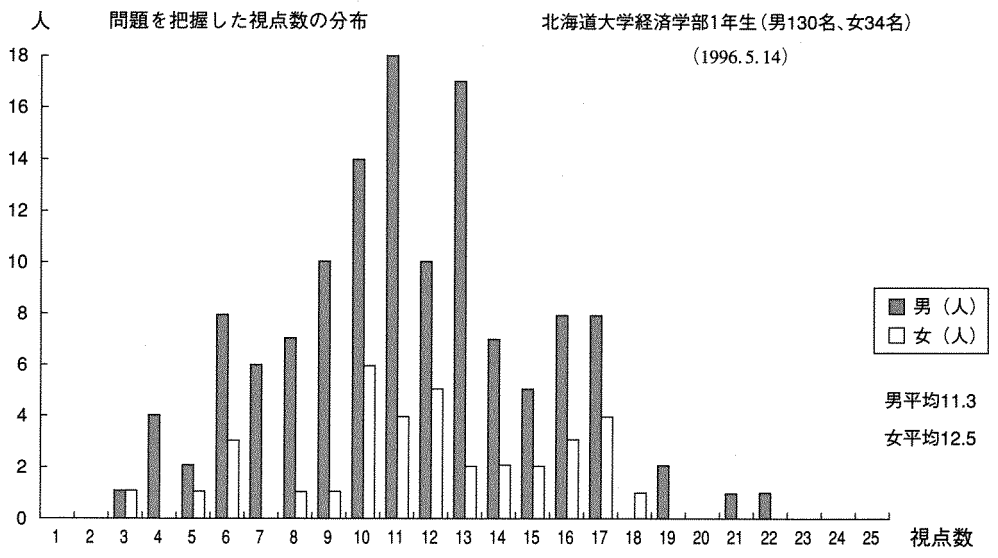
普遍と個別(Universal/Individual)，管理と自治(Control/Autonomy)の思考軸が，たどられていないことが，分る。もちろん若い世代であることは，生死，肉体と精神という思考軸によってものを考える必要性を感じさせる場面に立ち会ったことが少ないことを反映しているのであろう。

「需要と供給」，「ストック・フロー」，「上部と下部」について考える軸を持たないことは，

第4図



第5図　1995年度 大学・短大進学率を多面的に把握する



第 4 表　問題と視点　(思考の軸、切断面)　点検表

1) 最初に考え付いた視点 (思考軸)

2) 最も発展させた視点 (思考軸)

3) 最後に考え付いた視点 (思考軸)

4) 視点 (思考軸、問題の切断面)

(1)　時系列(Time Series)	(Yes,No)
(2)　横断面(Cross Section)	(Yes,No)
(3)　量(Quantiry)	(Yes,No)
(4)　質(Quality)	(Yes,No)
(5)　マクロ・ミクロ(Macro/Micro)	(Yes,No)
(6)　全体と部分(Toral/Part)	(Yes,No)
(7)　構造と機能(Structure/Function)	(Yes,No)
(8)　性(Gender)	(Yes,No)
(9)　年令(Age)	(Yes,No)
(10)　生死(Life/Death)	(Yes,No)
(11)　専門(Pofession)	(Yes,No)
(12)　地域(Area)	(Yes,No)
(13)　中央と地方(Center/Local)	(Yes,No)
(14)　国際(International)	(Yes,No)
(15)　過程と結果(Process/Output)	(Yes,No)
(16)　トック・フロー(Stock/Flow)	(Yes,No)
(17)　需要と供給(Demand/Supply)	(Yes,No)
(18)　内側と外側(Inside/Outside)	(Yes,No)
(19)　独立と依存(Independent/dependent)	(Yes,No)
(20)　個人と組織(Individual/Organization)	(Yes,No)
(21)　ホストとビジター(Host/Visitor)	(Yes,No)
(22)　上部と下部(Top/Bottom)	(Yes,No)
(23)　肉体と精神(Body/Spirit)	(Yes,No)
(24)　普遍と個別(Universal/Individual)	(Yes,No)
(25)　管理と自治(Control/Autonomy)	(Yes,No)
計	Yes(　), No(　)

5) 自分が独自に持っていた視点

6) 自分の発想パターンを把握してみると

7) Commnent

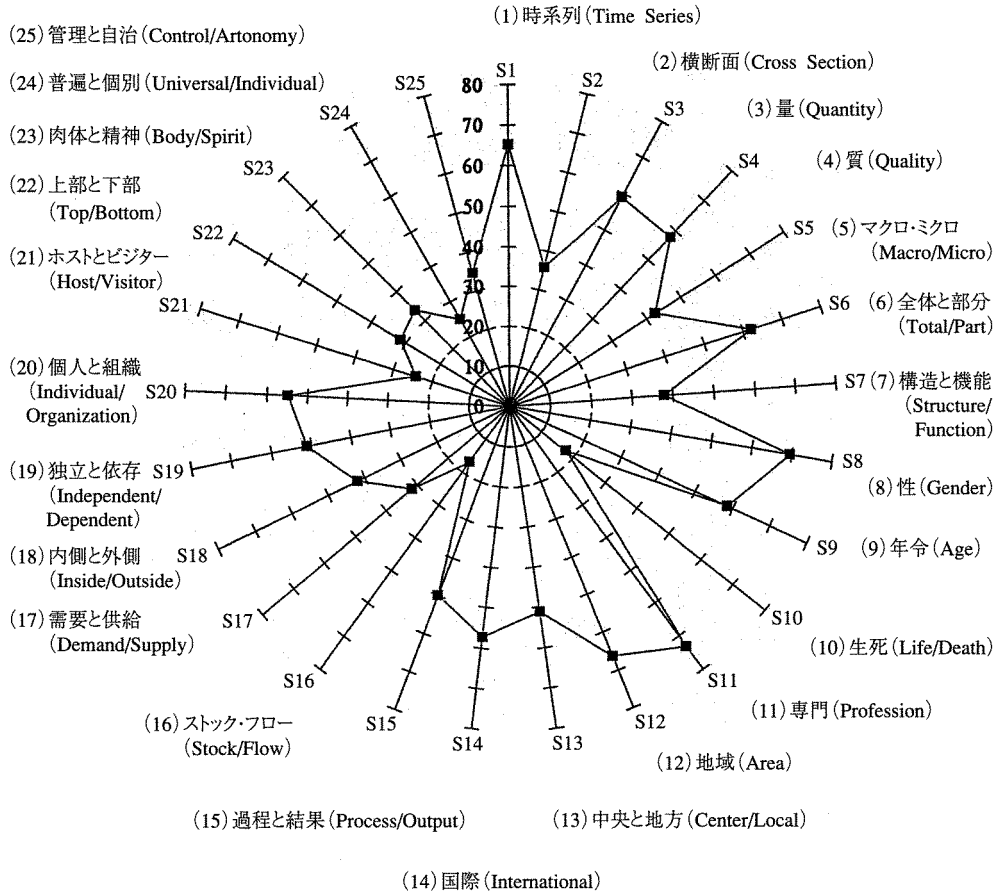
高校までの倫理社会等の領域を学ばなかったことの証であるのかもしれない。経済学部の学生として今後の学習が大いに期待されるところである。自らの自立が求められているライフステージに立つ若い世代として「管理と自治」に関する思考軸が弱いということは，気にかかる点である。さらには「普遍と個別」については，社会科学における一般理論と事例研究に関連しており，経営学研究においてはこうした思考軸が重要な役割を果たすものである。今後社会科学，人文科学研究が，それぞれの事象の個性(小宇宙) の意味を探究すべき課題を担っており，大学在学中の思考訓練が，具体的な学習と研究の課題の達成を通して行われることが必要である。

この思考マップ作成と問題の多面的把握のための思考軸点検の演習に関する学生の意見を求めた。自己点検を行った後に書かれたコメントは次の通りである。活用した思考軸の少ない者から順番にあげることとする。

(1) 3 軸：発想力がない。(Y 生)

第6図　問題を把握した思考軸・切断面（%）1996.5.21.

経済学部1年生（男130名、女34名）



（2）3 軸：1 つの視点を見つけてしまうとそれのみの発想しか出来ないが，それを発展させることが出来る。（F 子）

（3）4 軸：自分の思考は受験生的思考から抜けでていない。はっきり言ってカタイ。もっと多面的にものを考えなければならない。（W 生）

（4）4 軸：視野が狭い。奥行きがなく，やや短絡的なところがあると思う。（B 生）

（5）6 軸：思考軸，問題の切断面について様々な角度から物事を見る力に欠けていると思う。多様な視点で物事を見るときの基準となる軸を決めるのが，まだ出来ていない。（A 生）

（6）7 軸：自分の視点があまりにも狭いことに気がついた。多面的にとらえなければならない。

（7）8 軸：視点 1～25 を見ても考えも及ばなかったことが多く，自分の発想の貧困さ，視野の狭さを思い知らされた。もっといっぱい本を読んで思考能力を高めたいと思う。（K 子）

（8）8 軸：中・高と暗記中心の“受験勉強”のみの生活を送り，本を全く読まず，同じ問

題を繰り返した結果，単純でありきたりな思考しか出来なくなったように思う。(TAMA生)

(9) 8軸：テストの形式が客観式か記述式かのようなささいな点にこだわったあたり，自分はまだ社会に向けてのグローバルな視点を養えていない。受験生的思考にとらわれた人間だと痛感した。(WAT生)

(10) 9軸："受験といえば大学"という概念が全く消えていない。偏差値教育におけるパブロフの犬状態の浪人生活はキツかったようだ。(T生)

(11) 10軸：日本国内のことばかりに目が行き，国際的なことにはあまり関心を抱いていない。(KO生)

(12) 11軸：受験勉強のためか，享楽的になってしまい，視野が狭く，独自の視点が見当たらない。(KA生)

(13) 12軸：簡単な細分化をして時間経過をさせてみるといったワンパターンに傾いてしまった。もう少し広い視野で自分の発想パターンをと思っていたが，自分の考えの狭さに自信を失った。また知的というにはあまりにも的はずれな幼稚な感じだった。(FU生)

(14) 12軸：組織的，全体的に考えるのでなく，個人の質や内面で考えがちであるので，全体的な発想に乏しくなりがちである。(MI生)

(15) 14軸：自分の置かれている環境，自分の興味のある事象しか扱っていない。大人になりきれない子供のような短絡思考，将来への見通しが全くたっていない。ネガティブな思考ばかりで，ポジティブでない。海外留学に興味を持ちつつも，本格的に調べるでもない自分を見つけた。自分の考え方の幼稚さ，貧弱さに情けなくなった。(KS女)

(16) 15軸：最初に出てきた視点に最後まで固執する傾向があるように思われる。発想の視野が狭いと切実に感じた。(YOSI生)

(17) 17軸：自分のいる現在状況，環境を反映して，自分の興味，関心のあることや生活に密着する傾向がある。そのため自分から離れた外のことを考えられない。(S子)

(18) 17軸：その人の生き方について興味があるようだ。先のことについて考えてしまうようだ。まず現在のことから広い部分へと考える傾向がある。(YAM子)

(19) 17軸：物質的というよりは内面的，精神的なことに重きをおいている。(UE生)

(20) 17軸：独自の発想というのがなく，視野が狭いことがわかる。従来あるような発想つまり高校までの与えられたものを処理するという発想から抜け出していないことがわかる。思考の内容も深みがない。(MIY生)

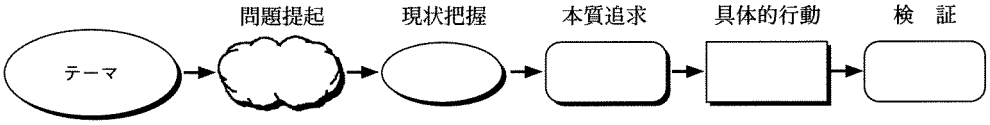
(21) 22軸：やはり経済学的な視座に基づく発想が中心となっている。私としてはもう少し発想に柔軟さが欲しいところである。(AM生)

以上のように簡単なマップによって1つの具体的データを，多面的に考察する演習を行った。データの考察に関して自己点検を行った結果，感性と洞察力の優れた学生は，自己の思考様式が持つ傾向を的確に把握しているといえよう。100万人以上の同世代人の行動の結果を示すのが，マクロ統計的データである。これを我が事として受け止めて，考察することは，自己対象化，相対化の出発点である。自分の行動結果もその1単位に含まれる社会的統計データをベースに思考を発展させる訓練は，社会科学教育の基本である。教室で講義される経済学(近代経済学，マルクス経済学)は，生活経験の希薄な若い学生達に抽象的な概念の正確な理解を求めている。しかしそこでは人として生きていく上で経験する喜びと悲しみ，希望と絶望，怒りと安らぎなどを，ないまぜにした生活と人生のリアリティが，欠落しているのではないだろうか。観照的立場で概念の理解と操作を教える教育には，根本的な欠陥が存在するといわなければならない。

第7図　“問題提起”から“問題解決行動”へのチェック・シート

1996 May
Hokkaido Univ.
Prof. Yoneyama

最も具体的で典型的なケース



	問題提起 ～が気にかかる	現状把握 経験した事実	本質追求 問題点は何か	問題解決の具体的行動 私は～をする
シート	7	17	22	19
自分の思考数				

Comment　　学籍番号　　氏名

Summary:

本文

作成年月日 1996. . .
氏名
組
学生番号

第5表　問題提起と具体的行動の対比表（1996. 7. 7）

	問　題　提　起	具　体　的　行　動
男子学生	1）将来社会に出たときの不安	1）専門学校に行く
	2）社会制度	2）学歴より能力を伸ばす
	3）応用力のなさ	3）自分の感じたままを述べる
	4）情報の洪水	4）情報処理能力の育成
	5）クラブ活動	5）立ち直り
	6）個人の独自性の尊重	6）現状に満足しない向上心
	7）多角的な視点を持つ	7）考える習慣を持つ
	8）対人交流	8）広く交流する
	9）どうしてこの思考が身に付く？	9）偏差値教育、受験制度の改革
	10）日本の受験	10）大学在学中の視点の転換
女子学生	1）他人に依存する	1）その過程を書き出してみる
	2）片寄った思考しかできなくなる	2）受験には必要だったが、興味のあるジャンルに挑戦
	3）テストばかり重視する	3）内容を理解し、身に付ける勉強をする
	4）与えられたことに慣れて、自分で行動が不得意	4）自分の頭で考えたことをもっと大事にすべきだ
	5）大学生活を充実させたい	5）もっと積極的に人と関わろう
	6）レポート作成	6）図書館や本屋でデータ集め
	7）受験によって形成される人格とは	7）何でもやってみてとにかく興味の幅を広げる
	8）意見交換の出来る授業の実現	8）講演会へ行く、幅の広い読書
	9）今自分が迷っているのは何か	9）様々な事にチャレンジ
	10）発想の柔軟性	10）いろいろな情報を入手し、柔軟な発想を試みる

(iii)受験生的思考からの脱却

「1995年の大学・短大進学率」の検討に使用した同じ様式のチャートを活用して具体的問題解決の思考訓練の課題を宿題として出した。テーマは「受験生的思考からの脱却をどのように実現するか」というものであり，Key wordとして「異質の交流と結合」,「集中と場面転換」をチャートにあらかじめ印刷しておいた。

テーマに関連して360度の視点から多角的に問題を提起し（～気にかかる），自らの経験を踏まえた具体的事実の把握（現状把握），そして本質追及（問題点は何か），これを踏まえて演繹的思考を働かせて問題解決のための具体的行動（私は～する）を記入する作業である。

宿題として持参したチャートを，教室内の時間を活用して第7図に占めるようなチェック・シートによって自分の思考過程を点検し，自己対象化の訓練を行うことを試みたのである。シートの提出を求め，これを集計して学生全体の思考様式の傾向を把握することにした。

提出されたチェック・シートが，記入の条件を満足しているかを点検し，条件を満たしているもののみを集計の対象データとして取り扱うことにした。第3表に示すように76.1%のシートが条件を満たすものであった。問題解決の具体的行動に至るまでの思考は，忍耐のいる作業であり，途中で作成を投げ出した者もあった。模範回答を記入する従来の試験とは異質の作業である。1つ1つステップを踏んで思考を発展させなければならない。日頃こうした思考をすることが少ないため，とまどいもあって時間を必要とする作業であったと思われる。知的作業には集中力と持続力が必要とされることを理解する手掛かりになることを期待してたのであった。

集計は，第8図に示す通りである。シートの全てのブロックをうめるまで考えた学生もいた。問題提起Rでは平均6.1項目（87.1%），現状把握Rでは平均10.7項目（62.9%），本質追及Rでは13.3項目（60.5%），最終の具体的行動で平均10.2項目（53.7%）となっている。(カッコ内は，ブロックをうめた%)

講義もだんだん終わりに近づき，ゲストスピーカーにより現実世界からのメッセージも伝えられた。学生にとっては将来の展望に結びつく課題を実行し学生生活の充実に向けて何をなすべきかを考える機会になったと思われる。

「各学生の問題提起」の短文からどのような「具体的問題解決行動」が，導き出されたのかを男子95名，女子33名について整理を行い，対象表を作成して，これを学生にフィードバックした。

この対照表の1部は，第4表に示す通りである。自己の能力開発の課題をどれだけ具体的行動として考えることが出来たのか，詳しい検討が必要である。ここではランダムにピックアップしたものを掲げておくことにしたい。

テーマに関して思考がどれだけ多面的，多角的に展開出来たのか。さらに具体的問題解決行動が，自己の生活経験を踏まえて，どれだけすぐに行動に移せる「具体性」を持っているかが，ポイントである。「抽象」⇔「具体」,「理論」⇔「実践」,「主観」⇔「客観」の往復運動をする思考様式。自らの学習計画,生活設計を行い，目指す人間像に近づくために1つ1つステップを踏むことの必要性。これらが手作業によって認識されれば，この課題を出した目的は,達成されたのである。

学生が書いたコメントの代表的なものをいくつかあげておこう。

(1)受験生的思考からの脱却には個性を尊重し，自分らしい生き方を追及することが大切だ。

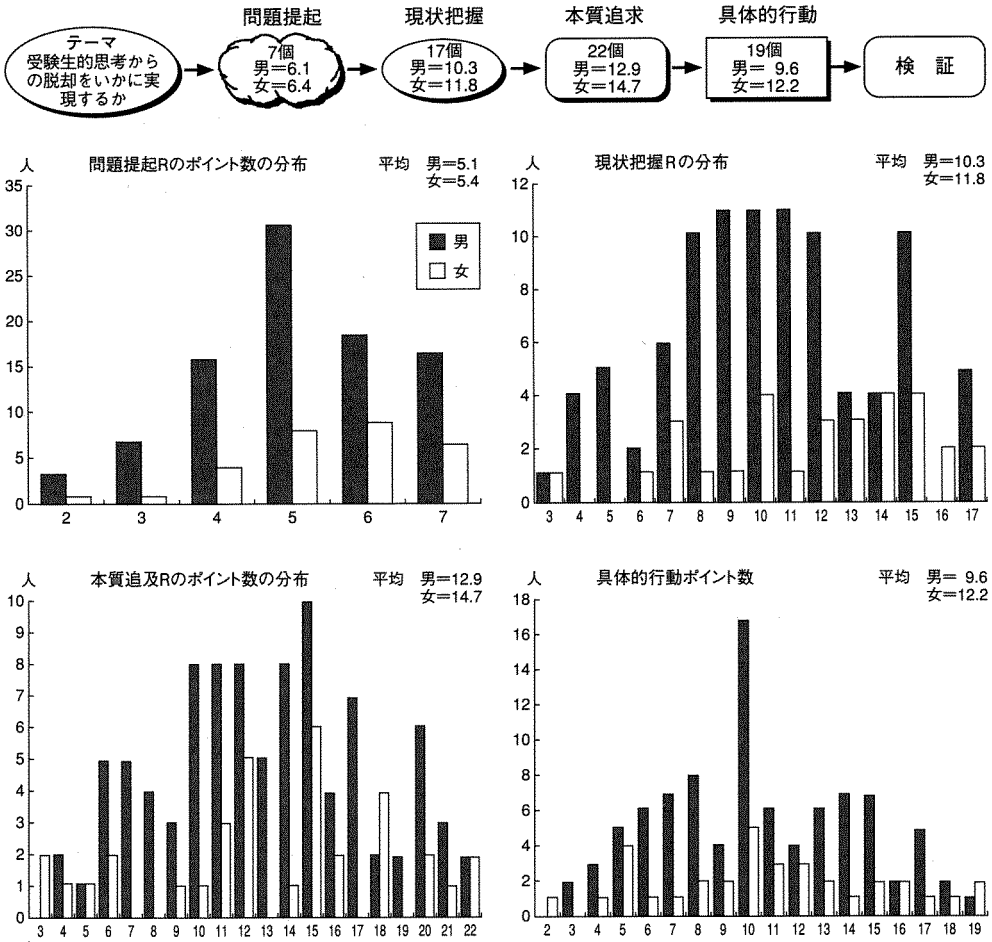
(2)受験生的思考イコール受動的思考

(3)受験生的思考は，個人の知的好奇心への自発的な働きかけによって克服できるであろう

(4)発想力のなさを関心事を探し，増やして徐々に改善したい

(5)小さな殻に閉じこもらず幅広い活動を通して社会を把握する

第8図　“問題提起”から“問題解決行動”へ　N=124　(1996.7.9)



(6)視点の数は少なかったが，考えを深めることが出来た

(7)学歴社会が受験生の心理，思考に与える影響

5．ゲストスピーカー・セッション

1980年代以降鉄鋼業，自動車産業，情報産業，総合電機産業，化学産業，証券などの産業界の第一線で活躍されている専門家を北海道大学経済学部に非常勤講師として招聘し集中講義の開講を企画運営してきた。こうした実務家による集中講義を企画したのは現代日本の大学と学問に対する次のような認識を持っていたからである。

「1976年のOECD調査団の批判に拠るまでもなく明治以来の近代日本の大学における社会科学研究には重大な欠陥が，存在すると思われます[52]。理論研究と称して先進諸国で流行する学説の翻訳，紹介を行い，辛うじてその日本的適用に関心を持つに止まっていることです。日本の社会の現場で起こっている諸問題を無視あ

52) OECD／文部省訳 (1980)『日本の社会科学を批判する』講談社学術文庫

るいは軽視して理論への信仰に陥るという精神的未熟現象が，いたる所に見られます。西欧諸国の社会歴史的経験を基に発想された概念とアジア大陸の東の端に位置する列島に形成され，遅れて資本主義化した日本社会の現実とのギャップを近代化論や革命論で埋め合わせて良しとする知的怠慢であります。可能な限り現場に接近し，揺るぎなき事実を基に全体像を描き，そこに発見された問題を具体的に解決するための理念，構想，具体策を考え出すことが，知的責任であるという認識が，極めて希薄であります。西欧社会からの遅れや歪みにこそ焦点が合わされ，議論が展開されてきたのである。

“象牙の塔”という幻想と空虚な権威の中に身を置いて，現実社会を軽視してきた「大学人」と称する人間の退廃こそ問わなければなりません。学問の自由の美名の下に社会の公の器である大学の私物化が行われ，大学外との交流に対して極めて閉鎖的姿勢を持ち，何ら顧みるところがないのが，一般的傾向であります。地球環境の深刻な危機に陥った20世紀末の人類社会が，直面する諸問題の解決に対して新しい理念と方法と具体策においてどのような貢献が出来るのか—これこそが学問の真価を問う試金石であります。市民の個人的趣味としては大いに結構なことでありますが，職業として行われ国民の税金によって支えられた学問研究が，問題解決という視点と社会的貢献という認識を持たない場合は，反社会的であり，無意味ですらあります。知的創造性が枯渇し，その社会的機能が内部から麻痺する危険性をはらむ現代日本の大学を，人類の文化の継承と創造の場として復活させるには，社会的各部門の間の異質の交流を盛んにし，その知的作業の成果を作品として社会に提出することが，必須の条件であります。そのためには社会の現実の諸問題を揺るぎなき事実のレベルにおいて把握し，その解決のために真摯に努力している人々の声を虚心坦懐に聞くことからスタートしなければなりません。もちろん国境と文化を越えた国際交流も不可欠であります。」[53]と。

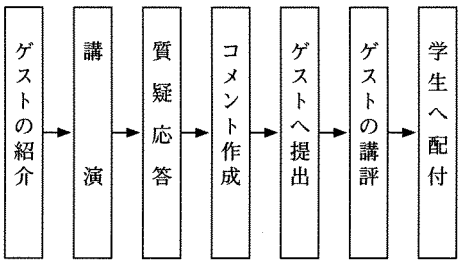
このような問題意識を継承して大学1年生が社会的各部門における実践の経験から直接学ぶセッションを設けることにしたのである。日程とゲスト・スピーカー及びテーマは次の通りである。

5月28日	「北海道経済の現状と課題」 北海道庁経済調査室 金子　佳弘氏
6月4日	「企業における人材育成—現状と展望—」 北海道生産性本部事務局長 古里　英一氏
6月18日	「日本経済における構造変化と企業活動への影響」 北海道拓殖銀行調査部 志田　篤俊氏
6月24日	「ツールとしての英語」 北海道大学経済学部　助手 Peter Firkola氏
7月2日	「沖縄からのメッセージ」 沖縄県北海道事務所長 田里　正夫氏

このセッションの進め方は，第9図に示す通りである。

53) 米山喜久治編(1991. 11)『現代の産業と経営—1990年度連続講義要録』pp.175～176　北海道大学経済学部
1990年度北海道大学経済学部において展開した米山の企画と運営による「現代の産業と経営」と題する連続講義は，従来の個別産業を深く研究するスタイルから日本の産業全体を横断的に把握することを目的に，90分の講義に1名のゲストスピーカーとして招聘する方式を採用した。この連続講義には地方自治体，産業界等から10名の方々を招聘したのである。この成果が，この要録『現代の産業と経営』である。

第9図　ゲスト・スピーカー・セッションの進め方



講義内容の要点とコメントを記入するB5版用紙を配付。講義終了後これに記入して提出し1日の終了とする。

提出されたコメント用紙は，収集後ゲストスピーカーにまとめてお渡しして読んで頂き，これに対する講評のフィードバックをお願いした。回答された講評の文章は，次回の講義に印刷して学生に配付する方式を採用した。

第1講：『北海道経済の現状と課題』北海道庁経済調査室室長　金子佳弘氏

［配付資料］：北海道庁「経済白書―北海道経済実相報告書平成7年版」

北海道通算局「目で見る北海道産業平成7年版」から作成した統計とグラフを記載したB4版1枚綴り資料「北海道経済の概要」

明治政府が実施した北海道開拓における開拓使とそれを継承する地方自治体としての北海道庁の役割。戦後の経済復興のために導入された傾斜生産方式と石炭業の興隆，食料基地としての北海道の役割，さらにはバブル経済崩壊後の21世紀の日本経済に占める北海道の役割（残された豊かな自然をベースにした第1次産業と連結する観光，サービス産業と情報産業の可能性）についての解説。特に北海道の持つ“価値を磨くこと”を北海道版の“一村一品運動”を企画，推進した経験から説明した。学生達には「若い時代に“時代感覚を磨く”，“現場感覚を磨く”こと“生き生きとしたイメージを持つこと”，“偏見なく素直にものを考えること”の重要性が強調された。

これに対して特に北海道出身の学生からは，「将来地方公務員の職について地域の発展に貢献することを考えるようになった」というコメントが提出された。ゲストスピーカー金子氏からのコメントへの講評は，寄せられなかった。

第2講：『企業における人材育成―現状と展望』北海道生産性本部　事務局長　古里英一氏

講義シラバス

1．はじめに～生産性本部とは～
2．企業における人材育成の重要性
3．能力開発活動の現状
4．能力開発活動の課題
5．求められる自立型人材の育成
6．まとめ～学生時代をどう送るか～

［配付資料］：富士ゼロックス総研『'95人材開発白書』（'94年10月～11月，人材開発担当者へのアンケート調査。対象2,094名，回答353名（16.9%））

「人事上の重要課題等の調査結果の要約表」B4版2枚

日本生産性本部（1950年創設）は，戦後日本における生産性向上運動のセンターである。主としてアメリカ経営システムの導入，普及さらには「労使協議制」の設立と運営に大きな役割を果たした組織である[54]。その北海道支部にあたるのが北海道生産性本部である。ゲストの講義は長く生産性向上運動に取り組んできた実務経験を踏まえたものであった。講義では高度経済成長の恩恵を被って公共投資を基盤に発展してきた北海道も経済の構造的な転換を求められていること。日本経済の国際化は，企業の経

54）日本生産性本部(1988)『日本生産性本部三十年史』日本生産性本部
　また生産性本部設立前の敗戦直後の時期には占領軍のGHQが，日本の経営近代化に果たした役割については，後藤俊夫（1999)『忘れられた経営の原点―GHQの教えた経営の質』生産性出版

営環境を激変させて，その担い手たる企業人に新しい能力としての「仕事への創造的取り組み」と「専門的知識・ノウハウの習熟」を要求していること。このような「産業教育」の転換は，大学卒業者に「まじめさ」,「協調性」を超える新しい資質と能力である「自分で考え問題解決行動の出来る自立性」が求められているとの議論が展開された。さらに学生時代には，単位をそろえて単に「卒業」するだけではなく，自分の関心に従って多様な知的領域を開拓しておくべきであるとのアドバイスがなされたのである。

この講義に対する次のような内容の学生のコメントがあった。

(ⅰ)「大学に入ってガッカリしていた私だが，最後のお言葉を聞いて，やっとその意図が把握できてとてもうれしかった。というのは，なぜ大学に入ってまで専門分野と縁もなさそうなことを学ばなければならないのか，疑問だったのだが，その思考自体が，自分の甘さを露呈していたということに大変ショックを受けたのだ。」(牧野)

(ⅱ)「非常に参考になった。大学で何を学ぶべきか，何を学びたいかをまだまだ模索している段階の私としては，とても有意義な講義内容であった。現代の世の中にある多様な選択肢も価値観や目的意識がしっかりしていないと何の役にも立たない。それらを確立するためにも，様々なことを見たり，聞いたりして自分の視野を広げていくことが，大切だと思う。そうして広げた関心の中で“自分はこれだ”と思えるものを何か一つ見つけられれば，現状のもやもやとした日々や，将来の展望への不安も解消される道が開けると思う。」(松山)

(ⅲ)「自律的な人間形成の話が興味深い。問題解決の技法というものは，受験的な意味とは全く違う意味であるのが，真であると感じた。サバイバルの企業社会の中，自分が有用な人間になりたいための方法が，少し見えてきたような気がする。」(辻)

(ⅳ)「企業より求められている自立型人材になるものの条件の一つとして受験生的思考からの脱却は，不可欠であると思います。その脱却はもちろん自立型人間として成長し，問題解決行動を身につけるための期間として学生生活を有意義に過ごすことが出来るよう，日頃から自分自身を高めていけばよいと思った。」(渋谷)

(ⅴ)「企業が求めている“自立型人材”には，現在の受験生的思考がしみついている自分にはほど遠いと感じました。従来の雇用形態が崩れつつある今，これから卒業して社会で生きていく自分にとって，受験生的思考から抜け出すことは，緊急の課題であると実感しました。そのためには日常生活の中で物事から逃げずに問題解決方法を身につけようと思います。」(江畠)

(ⅵ)「今後企業では能力主義を取り入れて個性，専門知識を持つ人材を必要としている。会社中心で生きていくのではなく，専門にとらわれない多様な物の見方を持つ人間になれるよう今後の学生生活を考えていきたいと思う。自立型人材の説明のなかで専門的能力，対人能力，社会的価値を持つ人間，そして自己責任で仕事をする人間があったが，自分にはまだまだ欠けているものばかりで反省させられた。少しでも近づけるように努力したいと思う。」(塚本)

このコメントを書いた学生に関する限りゲスト・スピーカーの講義の意図はほぼ正確に伝わったものと判断される。

以上のコメントを含む学生全員のコメントに対するゲスト・スピーカー古里英一氏からの講評は，次のとおりである。

「コメントを読んで」

「時間の制約もあり雑駁な講義であったにもかかわらず，熱心にご聴講の上，貴重なコメン

トをお寄せいただき，ありがとうございました。全部のコメントを読ませていただいて，皆様が，講義の内容を的確に把握されていることに感心いたしました。厳しい競争を勝ち抜いてこられただけあって，理解力は抜群とお見受けしましたが，かなりの誤字脱字が見られたのは残念でした。

さてコメントは，人材育成に関するものとこれからの学生生活に関するものとに大別できました。

人材育成に関するものでは，企業は人なりを認識した，実力主義は当然，激動期においては自立型人材は必要などの肯定的な意見が大半でした。

今後の学生生活に関しては，目標を持って生活していく，積極的に学ぶ姿勢を身に付ける，広い視野と知識を得る，自己の意見を持つようにするなど，大学生活を有意義に過ごしたいとの意欲あふれる意見が，多くありました。また，社会的価値観を身に付ける努力をする，対人関係の能力を高める，問題解決能力の習得なども重要な課題と考えておられました。その他，将来会社を起したいと考えているので能力開発に積極的な会社に就職したい，実際に人材をどう集めているかに興味がある。将来われわれが日本経済の担い手になれるよう努力したい，などの意見もありました。

多くの方々が，本日の講義は学生時代に何をどう学んだら良いかを考えるキッカケになったと言って下さったのは，私にとって望外の喜びでしたが，他方それで良いのかとの思いに駆られたのも事実です。

私の講義は，一つの情報提供であったことは，確かですが，その情報のみにもとづいて「素直に」判断する姿勢には，物足りなさを感じました。“情報とは，二つ以上の違った意見である”との定義があるそうですが，一つの情報だけで判断する危険性はご理解いただけるものと思います。受験的思考からの脱却とは，一元的な情報ではなく，多元的な情報をもとに自分で考えて判断し，行動していくことではないでしょうか。

一方少数ではありましたが，実績だけの短期的評価で良いのか，早期選抜制は，日本的雇用慣行に馴染むのか，能力はさほどでなくても努力している人をどう評価するのか，学生時代は一つの専門に集中すべきではないか，などの疑問が出されておりましたこともあわせて報告しておきます。

グローバル化，ネットワーク化の進む現在，わが国は多くの困難な課題を抱えております。皆さまが何でも貪欲に吸収していく「素直さ」を大切にしつつ，日々の学習を通じて，多様な情報の下で的確な判断が出来る人材に成長していかれることを心から期待しております。」と。

講評の文章は（A 4 版 1 枚），印刷されて学生たちに配付された。

第 3 講　『日本経済における構造変化と企業活動への影響』北海道拓殖銀行　調査部　志田篤俊氏

［配付資料］：図表「構造変革の過程」，拓銀調査「北海道における仕入れ・販売の変化について」等を含むグラフ，統計データのＢ 4 版 6 枚綴りの資料

1．日本の景気循環
2．構造変革の過程
3．円・ドル相場の推移
4．製造業海外生産比率の推移
5．北海道における仕入れ・販売の変化について
6．雇用状況の変化

まず講義に先立ってゲストから「大競争時代」という言葉を知っているかどうかの質問を学生に投げ掛けられた。3 年前からマスコミで盛ん取り上げられてきた言葉である。しかし高校時代に受験勉強にしか関心を持たなかった学生は，世界と日本経済の動向について基礎的な知識を全く持っていないことが，明らかである。こうした関心と知識のレベルから出発する

ことを再確認する必要があること等，あまり勉強をしなかった自らの学生時代の反省を込めて話が進められた。

配付された資料を基に日本経済のマクロ，ミクロの現状と課題，さらには北海道拓殖銀行調査部が独自に行った調査に基づき価格破壊の背景（価格決定権が，メーカーから消費者に移りつつある現状）が説明された。

結論として銀行の実務と調査部の経験をベースに企業が，学生に求めるものは，単にあれこれの知識ではなく，「ある問題にどうアプローチをするか。どう解決するのか」という能力である。アプローチは多様であり，解もまた多様である。ここで大事なのは，正解に至るアプローチである。こうした解を出すためにはいろいろな専門を持った人と議論をしなければならない。卒業した大学の名前など全く役に立たないのであり，必要なのは学生時代にどれだけいろいろな領域に興味を持っていたのかということである。4 年間のんびりやっていてもいいが，考えるトレーニングを受けることが重要である。企業社会は非常にクールで，能力がないと評価されないとの内容が話された。

受講後に学生達が提出したコメントに対してゲスト・スピーカー志田篤俊氏からフィードバックされた講評は次の通りである。この文章は，印刷して学生達に配付された。

「北大経済学部 1 年生の皆さんへ：先日はご静聴頂きありがとうございました。皆さんのレポートを 1 枚 1 枚全部拝見しましたが，とても真面目に自分の問題として前向きに考えておられ，感心させられました。短い時間に欲張って多くのことを述べようとしたため，言葉足らずであったり，内容にまとまっていない点もあり。私の言わんとしたことが，なかなか伝わらないのではないかと不安に思っていただけに，多くの皆さんが，何かを感じてくれたことをありがたく思います。一方，皆さんが期待されていたような自分の社会生活における実体験を話にもっと盛り込めば良かったのでしょうが，時間が少なかったこともあり，ほとんどそういった話が出来ず，申し訳なかったとも思っています。また中に私が「偉そうなことはいえないが」という発言をしたことに対し「もっとズバッと言って欲しかった」というコメントもありました。私自身も自信なげに言うことは不安を与えるかもしれないと思いつつ，OB だから，社会に出た先輩だからといって偉そうなことを言わず，本音のところをいっておきたかったというのが，正直な気持ちであります。（仕事であれば逆に自信がそれ程なくてもはったりをかましているところです。）

ある程度勉強された方にとっては，少し物足りなく感じたり，もっと具体的な話が聞きたかったようですが，これも先程触れたように私がやや欲張りすぎ，舌足らずになったためと反省しております。特に構造変化の解決のプロセス，ないしは新たな成長分野のところが具体的でなかったとの指摘を受けましたが，確かにこの点は説明不足でした。ここでも十分な補足が出来るわけではありませんが，少しコメントさせてもらえば，「新たな生産システム」なり「新コスト体系型企業」といっても全くこれまでとは違う画期的なシステムや企業というわけではなく，ここへ至る手法としては，あの時述べたような仕入れ，販売の見直しや雇用削減，合理化・省力化に結びつく設備投資を行うといったことの積み重ねになると思います。しかし，その基本的な考え方として，これまでのような供給者側の押し付け的思考から，より消費者に近い側のニーズを的確にとらえる思考へと 180 度の転換が迫られており，その意味で新しいといえるのです。「柔軟な労働市場の実現」とあるのも言葉だけでは分かりずらいのですが，これまでの日本的雇用慣行から脱却し，ある程度流動的な（つまり簡単に言えば転職が社会的に非常にスムーズになるような）ものになる必要があるということであり，これも従来の考えを引きずっていたのでは実現しないでしょう。またあの時には述べられず，皆さんの感想の中にも

ありましたが，私の年代ぐらいから価値観が大きく変りつつあり，経済成長至上の考え方ではなく，もっとゆとりを大切にするという考え方も広がってきています。そうしたニーズに答えるためにも新たな成長分野は生まれてくると考えてもらっていいと思います。

これまで，いろいろな話をしたり，書いたりしてきましたが，これらにしても当然の事ながら「正解」というわけではなく，一つの見方に過ぎません。私が言っていることは，間違いかもしれませんし，別な考え方もあるかもしれません。自分に納得させるだけの「正解」を見つけるためにも，もっともっと多くの意見を聞き，知識を広げ，他の人と議論しなければなりません。何もしなければアッという間に過ぎてしまう 4 年間です。大事に過ごして有意義な大学生活を送って下さい」と。

またこの『現代の経済Ⅰ』の担当教官である筆者には，次のような私信による感想が寄せられた。

「学生のレポートまで頂き恐縮に存じます。私は外部でこうした話をする機会が，それ程多いというわけではありませんが，話したものに対するフィードバックを頂くなどなく，私にとって大変勉強になりました。予想外に，と言っては失礼ですが，学生たちが，非常に真面目にレポートを書いてきたことに関し，少なからず驚いています。ただ，1 年生で純粋無垢であるからしょうがないのかもしれませんが，欲を言えば，私の話に対して率直すぎるくらいそのまま受け止めている学生が多かったかなというのが，若干物足りないように思いました。強く批判している人は，1 人で，あと 2～3 人が，多少の不満を示していた程度であり，5 人は噛みついてくるだろうと思っていただけにちょっと肩透かしを食らった気もします。しかし，そうは言っても褒めてくれるのには悪い気はせず，批判する学生が少なかったことに対して，内心ホッとしているのが正直なところであります。」と。

第 4 講：『英語によるコミュニケーション・スキル』北海道大学経済学部　助手　Peter Firkola 氏

ゲストの紹介に続いて筆者の方から次のような解説をした。将来国際的なビジネスの現場で必要とされるだけではなく国内の日常生活にあっても異文化間コミュニケーション能力が必要とされている。その場合好き嫌いを超えてコミュニケーションのツールとしての「英語」の重要性が，増大している。大学入試のための英語ではなく，留学生の友人を持つためにも，また自らが外国に留学するためにも必須となるのが，「英語」である。配付した新聞記事の資料「どれを受けます？英語の検定」(検定の名称，級，試験内容，試験期間，受験料，特徴，主催者の一覧表）に基づき，英語圏の留学には不可欠の TOEFL(Test of English as a Foreign Language)は，試験内容が，「リスニング，文法力試験，読解力試験」特徴として「英語を母国語としない人が，米国の大学などに留学するとき，授業についていける英語力があるかを調べる試験。合否の判定ではなく，得点で能力を判定する。」こと。また TOEIC(Test of English for International Communication)。国連英検，ケンブリッジ大学英語検定試験。トリニティ英会話検定，児童英検などがあることを説明した[55]。

Peter Firkola氏は Canada McMaster 大学 MBA 取得後，北大大学院に留学して経営学博士の学位を取得。1996 年現在経済学部助手の職位にある。講義は，全て英語で展開された。出来るだけゆっくりとしたスピードで話すことに注意が払われた。教室の中で学生に “English as communication tool”を実体験してもらうことに 1 つのねらいがあったのである。

55)「どれを受けます？英語の検定」朝日新聞　1996 年 6 月 1 日号記事

“Communication Skills in English”と題するB 4 版資料 1 枚が配付された。その内容は，以下の通りである。

1．Introduction
2．Why are Communication Skills in English Important?
3．How is different from High School English?
4．How to Improve Communication in English Ability?
5．Conclusion/Discussion/Question

第 1 項では，外国に関する知識の有無についてCanadaに関して 6 項目（首都，首相名，人口，国土の広さは日本の何倍か。ナショナル・スポーツは何か。独立した年）の質問が，行われたが，10% の回答しか有効回答がなく，そのうち正解も限られていた。コミュニケーションの基礎となる正確な知識の修得が学生時代に必要であることが指摘された。

次に「あなたは英会話教室に通っていますか？」の質問があったが，実行している学生は，ゼロであった。

第 2 項では，日本能率協会総合研究所「ビジネスマン，OLの自分磨き」（東京，大阪で商品開発，企画など情報収集の従事者，1994年）調査に基づき，日本ビジネスマンが必要とする能力のトップは，情報収集能力，2 位は語学力であることが紹介され，国際化するビジネスの現場にあっては直接外国人とのコミュニケーションのためにはツールとしての英語が，必要不可欠であり，将来ますますこうした傾向が強まる中で学生時代に語学力を高めることの重要性が指摘された。

Job/Businessのためにも英語が，必要であること，To get information-Internetにおいては90% 以上が英語で情報のやりとりが行われており，ここでも重要であることの指摘がなされた。

第 3 項では，高校英語と英語によるコミュニケーション(Communication English)の違いについて(Communication tool, Action, Content, Active, Other Person Focused, Unclear, Self-decided Goal, Communication, Key Points)の観点から説明がなされた。英語もピアノの演奏と同じで練習と実践が不可欠であることが，強調された。

第 4 項では，英語によるコミュニケーション能力を磨くためには，Active listening, Speakingについて説明がなされ「ただ話すだけでは，コミュニケーションが成立していない」，「聴くことは，そこに必ずフィードバックがあり，往復運動があり，いつも相手を見て考えていることである」との指摘がなされた。

結論として，コミュニケーションには，自分自身，個人間，発表の 3 段階があって言語のスキルを磨くことは，コミュニケーションスキルを磨くことであるとの説明がなされた。

講義終了後学生達から提出されたコメントには，「初めて英語による講義を経験した」という意見が圧倒的に多く，「ゆっくりとしたスピードであると言われるが，あまりよく聞き取れず，自分の英語によるコミュニケーション能力が低いことを自覚した。学生時代に能力を向上させたい。」と書いた学生が，多くみられた。

こうした学生からのコメントに対してゲスト・スピーカーのPeter氏から口頭で筆者に次のようなコメントのフィードバックがあった。「日本の若い人々は，中学以来 6 年間も英語の教育を受けているが，読むことが中心であり，それも受験を目的としたものになっている。マスコミではしばらく前までは「国際化」が叫ばれ今また「グローバル化」が叫ばれているが，一人一人のコミュニケーション能力を見たとき果たして実現出来るのだろうか。高校以下の英語教育を受験英語から自由にすること，また大学の英語教育は徹底して“English as communication tool”の観点に立って再編成する必要があるのではないか。これは日本人だけの問題ではなく，日本人とお付き合いさせて頂く外国人にとっても重要な意味を持っている。普通の外国

人にとって日本人がきちんと英語で自分の考えていることを伝えてくれないと，日本人が何を考えているのか解らないのである。」と。

第５講：『沖縄からのメッセージ』沖縄県北海道事務所所長　田里正夫氏

［配付資料］：沖縄県『沖縄からのメッセージ』，『沖縄県勢要図』から作成した統計，図表と地図を含むＢ４版５枚綴りの資料。

「沖縄からのメッセージ」レジュメ

１．米軍基地

（１）強制的接収　（２）面積〔陸域，水域，空域〕

（３）基地返還の実績　（４）基地収入　（５）軍事基地故の事件　（６）教育環境　（７）地位協定

（８）思いやり予算

２．沖縄三法

（１）沖縄の復帰に伴う特別措置法　（２）沖縄振興開発金融公庫法　（３）沖縄振興開発特別措置法

３．基地返還アクション・プログラム

（１）国際情勢の変化　（２）地球規模の課題

（３）アジア情勢の変化　（４）国内情勢の変化

（５）地方の時代と主権

４．沖縄の課題

（１）産業　（２）雇用　（３）財政依存　（４）米軍基地　（５）環境　（６）国際交流

５．国際都市形成構想

（１）平和，共生，自立　（２）沖縄の特性　県民性，地理，歴史と文化

６．国家的課題

県民条例，住専，エイズ，国債，地方債

沖縄県庁作成のビデオ『沖縄からのメッセージ』が上映された。沖縄の歴史と現状に関してほとんど関心と知識のない学生にまず映像によって理解を深めてもらうためである。

北海道も夏，７月２日になり学生であふれる大教室の暑さは，亜熱帯地方の沖縄をイメージするにはプラスの意味を持ったのではないだろうか。

学生達は上映されたビデオによって太平洋戦争末期の“鉄の暴風雨”がふいた悲惨な沖縄戦以来の圧倒的な米軍軍事基地の支配と影響を受ける歴史を初めて知ったのである。

ゲストは，配付された沖縄県勢要図（平成７年版）からの抜粋の統計，グラフによって沖縄の歴史と現状についての説明を行った。特に沖縄の運命を左右してきたのは太平洋戦争中に上陸した米軍が，そのまま駐留し，恒久的な基地を建設したことである。今日まで半世紀にわたり沖縄を事実上占領し続けている実態に，注意を払ってもらいたいと静かな語り口の中に強い憤りと深い悲しみをたたえた説明であった。学生達には「今まで沖縄の事はほとんど何も知らなかったが，今日の講義で自分なりに問題を考えていきたいと思うようになった」と受け止められたのであった。

平成７年３月31日現在日本にある米軍専用施設は，全国で31,558 haあり，その内75%(23,660 ha)が，狭い島の沖縄に集中しており，特に嘉手納町では，町面積に占める米軍基地の面積は，82.8%に達しており，文字通り基地の中に「町」があるとの指摘がなされた。

1990年の東西冷戦の終結によって国際情勢は大きく変化しており，軍事基地の縮小，撤廃によって国際平和に貢献することが，沖縄県民の願いであり生きる道であるとの説明がなされた。海とともに生きてきた沖縄の人々の県民性は，開放的であり，武力ではなく対朝鮮，対中国，対東南アジアの諸国との交易を中心に発展してきた歴史と文化が語られた。米軍のアジアと世界に向けた軍事戦略拠点(Key-stone)としてではなく平和と国際交流の拠点となるべき内発的発展の道をたどることが，21世紀の沖縄の課題であるとされた。それを促進するために日本国政府の責任は重大であるとの指摘がなされた。

講義終了後学生からのコメントが，提出されこれはゲストに手渡された。ゲストからは後日口頭で先に記載したコメントの内容が，紹介さ

れた。「大学に新しく入学してきた若い人々に，沖縄の歴史と現状を率直に受け止めてもらえて大変うれしい。米軍基地に象徴される太平洋戦争の負の遺産に押しつぶされて自律的発展と住民の幸福の実現が困難な沖縄という地域が，この日本列島に存在していることを考え続けてもらえるとありがたい。」との講評があった。

6．学生による授業評価

1996年7月講義の終了前に学生には，6項目の評価点を含む評価表を配付した。これを回収し集計結果とコメントを記載した「受講学生による評価とコメント」(B4版5枚)を作成しフィードバックした。男子学生131名，女子学生36名計167名による評価内容は，次の通りである。

(i)受講態度（自己評価）

入学直後に開講された科目であったが，第10図に示すように約18%の学生が積極的に取り組んだと自己評価している。約75%の学生が，普通と答えており，他の科目履修と受講態度に大きな差がなかったと認識している。教室の後部では，講義が始まっても私語が終わらず，スタートするのに時間を必要とした。またクラブ活動などでの疲れが原因であろうか，居眠りをしている学生もおり，これが7%の「よくない」との認識につながったものといえよう。

(ii)理解のレベル

講義内容の理解レベルを%で質問した回答は，第11図に示す通りである。男女とも60%以上が多く，内容はほぼ理解されたと考えられる。

各理解レベルの代表的なコメントを次にあげることにする。

[90%]（1）自分に大変関係のあることだったので授業以外の時でも考えることができた。（山本）

（2）自分でも考えていたことだったのでスムーズに頭に入ったから。（河原田）

（3）毎回講義の本質的な部分は一貫性があったから。（石野）

[80%]（1）宿題として出されたプリントを埋めることによって，先生の意図することと自分の考えの方向が同じだと確かめられたから。（板垣）

（2）ゲスト・スピーカーの話しは大変ためになったし集中して聞いた。受験生的思考からの脱却をはかるきっかけを持てたから。(塚本)

（3）ゲスト・スピーカーや先生の話しにより大学でやるべきことが見えてきたから。(山来)

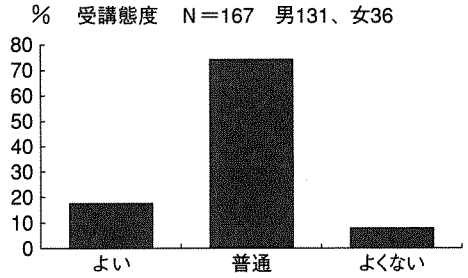
（4）自ら自覚していった点と共通の項目もあり，ほぼ理解できていると思う。(湯谷)

[70%]（1）内容が自分に身近な分，興味を持てたので頭の中に入りやすかった。(丸谷)

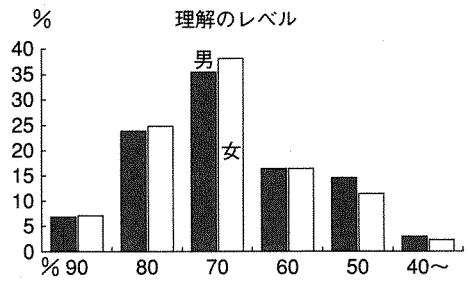
（2）授業の始めの頃，変わった講義だったので面くらって，よく理解できなかった。(山田)

（3）講義の中でいいたいことが執ように繰り返

第10図



第11図



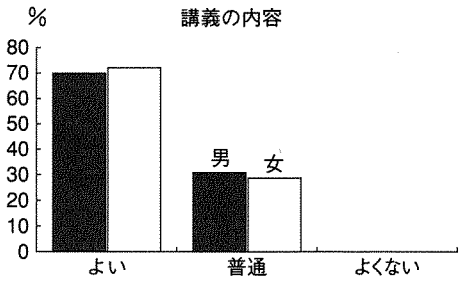
され，理解しやすかった。(笠井)
(4)講義を聞いて気付いたりすることが多いが，その先がまだどうしたらよいか具体的に進めないから。(三浦)
[60%] (1)席が後ろのときOHPで映されたものが，見えなかったりして時々内容がつかみづらい時があったから。(飯盛)
(2)自分の中で学び，考えたことが消化しきれていないから。(川原田)
(3)自分の知識の範囲外の話が多くよくわからないことが多かった。(佐藤)
(4)高校における授業とは異なり，自主的な考え，また要約能力を問われる場面が多く，とまどいも多かったから。(上新)
[50%] (1)要は受験生的思考から早く脱却して社会に出ても使える人間になれ，またそういう知識を大学で身に付けよということだろうが，それだけではないような気がするので。(牧野)
(2)理解しているかどうかいまいち認識出来ていない部分もあるので。(酒井)
(3)90分も集中力が続かなく，途中いいかげんに聞いていた。(青木)
(4)興味深い話は集中したが，興味が持てないとあまり集中しなかった。(田部)
[40%〜] (1)自分の中の何かが変わった気がしない。(斉藤)
(2)講義内容は把握できたと思うが，これを理解するには実際の経験が（これから）必要になると思います。(田島)

(iii)講義の内容

「よい」,「普通」「よくない」の3段階評価を求めた結果は,第12図に示す通りである。「よくない」としたものは，ゼロであり，企画が受け入れられたものと考えられる。代表的なコメントは次の通りである。

[よい] (1)社会に出て役立つような人格を成長させるという目的に達する過程として大学

第12図



の4年間をいかにして過ごすかという指針を見付ける助けとなったから。(新吾)
(2)もう一度改めて原点を見直す機会となったし，本当に大切なものを漠然とではあるが，理解できた。良薬口に苦しというように分かる分，自分の中でいろいろな気持ちに当たって正直最もつらい講義であった。(松江)
(3)現代的な内容がぎっしりつまっていて，他とは違った種類の学問をしたような気がする。頭よりも心を鍛え直されたような気がする。(渋谷)
(4)社会学（もしくは学問）入門的内容は，これからどんな専門分野に行っても必要であり，教養時代にしか出来ないと思うから。(山田)
(5)大学に入ったばかりの僕にとっては，方向性を見失いそうであった時期に，大学において何をなすべきかを学ぶことが出来，この講義は取ってよかったと思う。(朝野)
(6)自分は受験生的な閉鎖的な考えかたをしていると気付かせてくれたし，その脱却の方法や考えることの大切さを気付かせてもらった。(池田)
(7)講師の先生が，たくさんの事例を挙げて趣旨の把握を促してくれたから。また授業が終わるごとに複数の問題意識を胸に残すことのできる授業だったから。(辻)
(8)当初大学で想像していた講義形式ではない斬新な講義だった。経済学の専門ではなく広く社会科学を学ぶ上での基礎であるとか，実

社会で議論されている要点が詰め込んであったから。(新沼)

(9)授業のスピーチ，ゲストのスピーチを聞いてドキッとすることが多かった。他の講義と違い特定の分野を学ぶのではなく，広い範囲を学んだと思う。(野村)

(10)この講義でやったことや考え方は他の講義や活動にも幅広く活用出来るものと思う。(山田)

[普通](1)『現代の経済』というよりは，全ての文系にあてはまる内容であったと思う。(藤田)

(2)今までにない講義だったのではじめ多少の戸惑いがあった。ゲストスピーカーが，多かったので，講義という感覚が少ない。

(3)今までの受験生型思考を変えていかなければならないことは，よくわかった。だが，それを理解しただけに止どまっていたから。(水野)

(4)面白く役に立ちそうな話だったが，ややくどい面があるように感じた。(藤森)

(5)社会に出てからの話であまり実感が湧かなかった。(渡辺)

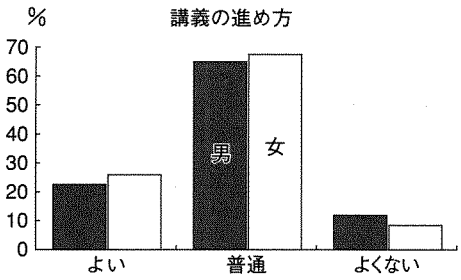
(6)日本の大学生の能力開発に重点を置いているのはよかったが，「現代の経済」という科目名にとらわれて，ノートメーキングがうまくいかなかった。何をするのかをはじめにもっとはっきりさせるべきだ。(河野)

(iv)講義の進め方

講義の進め方について「よい」，「ふつう」，「よくない」の3段階評価を求めた結果は，第13図に示す通りである。

「よくない」のは，まず大教室でのマスプロ教育のスタイルである。今回の学部新入生全員を対象にしたカリキュラム編成の限界である。質疑の時間を設けたが，これもあまり有効に機能しなかったと言わなければならない。学生相互の討論の時間と場面は，時間的，机の配置，人数などの制約で設けることが出来なかった。

第13図



設備のOHPが，教室の後方からは見づらく，意味がないとの批判は，その通りであるというだけで弁明の余地がない。

学生の代表的なコメントは，次の通りである。

[よい](1)毎回毎回同じペースで入り込みやすかった。最初は展開が速すぎると思ったが，今ではそのお陰でたくさん人の話が聞けてよかったと思う。(新貝)

(2)OHPなどを使っているためわかりやすかった。また先生の話を自分なりにまとめるNote-takingの方法もだいぶ鍛えられた。(山本)

(3)ゲストスピーカー招聘システムを含めて，現実的な事柄に関することをマンネリ化することなく学生に興味を持たせるように進めていたと思う。(上田)

(4)すごく先生に教える意欲が見えて進めてくれたので，こちらも緊張して授業を聞くことが出来た。(西村)

(5)アンケートやプリントの宿題の結果などをまとめてそれを講義に取り入れてくれたので大変興味を以て聞けたし，また面白かったから寝ることもなかった。(池田)

(6)学生に意見を聞いてみるなどして我々のレベルから物事を考え始めるといった進めかたは聞く者としては大変聞きやすい講義の進めかただった。(下出)

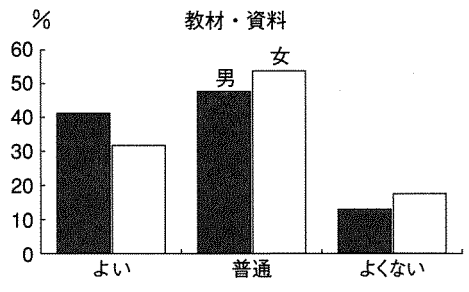
[普通](1)早口で聞き取れないことが，しばしばあったが，大きな声でキビシイ授業のた

め，講義には集中できた。(飯盛)
(2)常に与えられるのでなく，自分で実際に手を動かしてみて現在の自分を自己確認出来たのはよいが，やはり議論の場が欲しいと思った。多人数で不可能かもしれないが。(新吾)
(3)多くのデータを用いているのでわかりやすい。(細川)
(4)最後にコメントを書かせるのがよい。
[よくない](1)講義内容から考えて，こんなに多人数の人間を前に一人の人が話すのはふさわしい授業形態ではなかった。(山田)
(2)もう少しゆっくり進めていただけると頭の中でフィードバックが出来たと思う。(藤田)
(3)オーバーヘッドは，はっきり見えないので使っても意味がない。
(4)このような内容の勉強には，大教室での講義はふさわしくないと思う。1年次からゼミ形式で学びたい。(宮成)
(5)もう少しわかりやすい具体例を出してほしかったことやスライドを使った資料が見にくかった。(高橋)
(6)やはり一方的な講義では授業の効果も半減してしまうので，学生同士の話し合いの場を設けてほしかった。(高村)

(v)教材・資料

使用した教材と配付した資料に対して3段階（よい，普通，よくない）の評価を求めた結果は，第14図に示す通りである。「よくない」とする者が15〜17%ほどいたが，その理由についてのコメントは，あまり多くはなかった。学生のコメントは次の通りである。

第14図



[よい](1)くばられた資料などはとても興味深く。周りの人達の意見を知ることができてすごく良かった。(飯盛)
(2)自分と近い先輩によるアドバイス，自分で記入して作り上げる表など自己確認とこれからの生活を有意義にするための手助けとなるものであったから。(新吾)
(3)自分と同じ講義をうけた人達が，どういうことを考えているのかを知ることが出来たから。(福士)
(4)経済のことだけに限らず，さまざまなものがあって良かったと思う。(江畠)
(5)ここにいる学生の思考がトータルな形で見られるから。それによって自分の思考のさらなる発展の役に立つから。(西岡)
(6)段階的に自分の視野がどうなっているかが分かる教材であったから，わかりやすく納得しやすかった。(小笠原)
(7)“モモ”などの物語，ホームズなどの推理小説を取り入れたところが斬新だったから。(毛利)
(8)特に感じたのは，宿題のレポートのフィードバックにより自分の考えと他の周囲の人の考えを比較できたこと。同時に自分より優れている人の考えを読んで勉強できる形があってよかったと思う。
[普通](1)毎回のプリントによる宿題があったおかげで自分も授業に参加しているという感じがあった。(新貝)
(2)新聞からの引用がいいと思った。新聞からの切り取りなら，後になっても見ることがあると思う。(永長)
(3)資料の大きさがバラバラなので整理しにくかった。(今井)
(4)それぞれの講義に適した教材・資料を準備されたから。(吉田)
[よくない]OHPの資料の文字が見えない。(楠

田)

数10名が同一意見。→北大教養部の大教室の視聴覚機材／設備に根本的な問題あり。

大学教育のための設備投資が必要である。文部省の教育予算の増額が不可欠である。

(vi)ゲスト・スピーカーの招聘

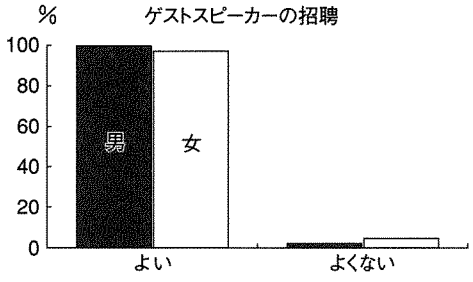
ゲスト・スピーカーを講義に招聘して学外の専門家から直接話を聞かせてもらう場面を設けたことに対する評価を，(よい，よくない)で求めた結果は，第15図の通りである。「よくない」とした人は数名であり，95% 以上のプラスの評価を得ることが出来た。「よくない」とした理由のコメントは，「後半に集中して登場した」ことに対する批判である。講義の前半部分では，学習と研究の方法論の説明をしており，いきなりゲストを招いても学習効果をあまり期待出来ないためにこうした時間設定となったのであった。

学生のコメントは，次の通りである。

[よい](1)大変よかった。当事者から直接話しを聞くことが出来，現場，現状がよくわかった。まったく初めて知ることも多く，大変勉強になった。またやってほしい。(秋野)

(2)ゲスト・スピーカーさんのお話しを聞くことは，すごくいいことだ。やはりその道(場)で，実際に活動されている人の言葉や態度から伝わってくるものは，本を読んだり，ただTVのニュースで聞くのとは全然違うから。

第15図



(大久保)

(3)近所のひとでもない限り，話を聞くことが出来ないであろう人達の話を聞くことが出来た。特に沖縄県の方の話を聞くことが出来たのは嬉しい。新聞等で報道されていることが，いかに適当で抽象的で，主観的な事であるかがわかったので。(楠田)

(4)大学生になって初めての経験だった。大学生になった実感がわいた。(増田)

(5)ゲスト・スピーカーの制度はぜひ続けてほしい。様々な分野の人の話を聞ける機会は，私達には少ないので。大学の制度として定着してほしい。(山田)

(6)とてもよかったと思う。多角的観点から物事を考察するという点で一人の講師の話を毎回聞くより，いろいろな人からの考えを聞くというのは非常に意味のある事であった。(柴田)

(7)先生の言う『現場主義』を取り入れたアグレッシブな講義であった。他の講義でも1度はあったが，5回もやってくれる人はいなかった。(金ケ崎)

(8)現場の人の意見を直接聞くことがよかった。特に最後の沖縄の話はテレビではよくわからないことがよく分かり，沖縄問題に対する理解がぐんと深くなった。(渡辺)

(9)大変おもしろかった。こういう形式は，いろいろな刺激があって良いと思う。(12週も同じ先生の顔を見るのは飽きるから)，いろいろな人の考えがその人自身から聞くことが出来，机上の勉強とは違うと思う。(小川)

(10)正直言って，ゲストの話は毎回集中し，メモを取った。これこそ大学なのだと思いうれしかった。同時に自分の知らないことや将来の展望が見えた気がする。(田辺)

[よくない](1)ゲスト・スピーカーが終盤になってどやどやとやって来たが，彼らと先生の話がおおよそ似通ったものであり，新たな発見が少なかった。前半から登場してほしかった。(牧野)

(vii)講義全体へのコメント

以上の評価内容は，印刷して学生にフィードバックを行った。講義最終回にコメントを提出出来なかった人は，定期試験の答案用紙の裏面に自由記入を求めた。これに答えたものは，文章が長くなったが，そのまま記載した。

(1)大学で自分がすべきこと，将来のために現在の自分はどうあるべきかを学んだ。(秋野)
(2)社会のことを知ることが出来た。この4年間で自分がやることの見通しが出来た。(福士)
(3)今後自分の考えを持ち，それをまとめ表現する能力をつけることが必要である。(生垣)
(4)この講義を通して自分を見つめ直す機会を得たと思う。(江畠)
(5)自分の好奇心にうそをつかずに正直に答えていくことで，自分を内面的に着実に進歩させていく。人との出会いや全人格的なお付き合いを大切にする。(松江)
(6)単なる経済についての講義ではなく，今後の世代が抱えている問題を解決していくにあたって，どのような事が求められているか，を示した講義であった。(坂田)
(7)受験生的思考から抜け出すきっかけを与えてもらったと思う。まだ私自身の思考は幼稚なものであるが，「メモ」を取るということを実践し，思考に幅を持たせたいと思う。(丸谷)
(8)今までの自分の知識の無さと社会に対する認識の甘さを分からせてくれるいい機会になりました。(大久保)
(9)この講義は他の講義とは全く違った形でとまどいもあったが，とても良い刺激を与えてくれた気がする。私にとってはとてもおもしろい講義でした。(柴崎)
(10)大学受験を終えたばかりの私達が，『受験生的思考から脱却するにはどうしたらよいか』，そして社会に出るためにはどのような事を考え，行い，生活していくべきかを学びました。(坂本)
(11)他の講義よりも自分が，授業に参加しているという感じが持てた。又宿題を出されたおかげで自分についてのことをいろいろ考えることが出来た。(新見)
(12)自ら作業することによって『受験生的思考』など自分では気付かなかったが，ぴったり当てはまることがわかり，これから自分が何をなすべきかということがわかり，とても為になる授業内容であった。(平野)
(13)自分で考え，ものごとにアプローチする重要性をつかむことが出来た。(水野)
(14)創造力と行動力，理解力を持つ，知性と知恵，光る（言いすぎだろうか）個人を育むための具体的な方法論。(楠田)
(15)これからの大学生活で，多くの人の考えと出会い，自分の視野を広げることが大切だと思った。受験生思考でなまった頭をフル回転させられた。(山本)
(16)受験生的思考が，いかに自分に浸透しているのかを考えさせられた。これからは自分で問題を解決して行こうと思う。(増田)
(17)受験生的思考の打破への糸口になったと思う。これからも常に多面的に物事をみつめ，的確な分析を試みていこうと思う。子供的思考からは抜け出せたとおもう。(川原田)
(18)授業が風変わり過ぎてなかなか適応出来なかった。新しい経験は何でも自分のためになるのでがんばった。(山田)
(19)大学合格ボケがさめていない自分にいろいろな分野で活躍する人たちの考えや今後自分に問われることなどいろいろ問題提示され，やっと目が覚めた。(小川)
(20)多くの講義をとっているが，他の講義は大学の講義のイメージ通りであったが，この講義はざん新で現実味のある講義でよかった。(宇田)
(21)とても興味深いテーマで毎回講義が展開されるので刺激的だった。方法を工夫して，こ

れからもこの講座を存続させて下さい。(村本)

(22)自分の殻に閉じこもらずに多面的な視野から物事を煮詰めていく態度が，社会科学を初めとした諸学問を学ぶ上で求められている。(笠井)

(23)自分のためになる講義だった。自分から力強く何かに向かっていかなければならないということを学んだ。(河原田)

(24)全体的に興味を持って聴けた。『受験生的思考からの脱却』など，身近な話題だったため，考えさせられることが多かった。役に立つ授業だったと思う。(石坂)

(25)とても新しいタイプの授業で，自分の考えに刺激を与えてくれるので感謝している。

(26)自己開発のためにまず受験生的思考から脱却することを始めとして視点の多角化，コミュニケーション能力の向上，自己の創造性を確立することを社会に出る前の大学時代に身につけるべきである。(新沼)

(27)“探究学”という今までにやったことのない学問をのぞかせてもらい，すごくためになった。これからの３年８ヶ月の道しるべとなった。(星野)

(28)他に類を見ない講義で，とても刺激的だった。とくにゲスト・スピーカーのお話は，これからの生活にとても役に立つものだと思う。(青葉)

(29)ゲスト・スピーカーの導入，人生論，エピソードなどにより経済の分野を越えたものが，得られた気がする。これからの人生をいかに生きるべきか，いかに充実させるかを考えつつ，日々過ごしていくという新たな問題が出来て，とても役立つ講義だった。(山本)

(30)講義は何か自分の今までの，そしてこれからの自分というものについていろいろ考えさせられるものがありました。ゲスト・スピーカーの話を聞いて，いろいろと社会構造も理解出来てよかった。(新木)

(31)大学に何のために入ったのか，また大学でこれから何をするのか，もう一度真剣に考える機会を与えていただいたような気がします。(今井)

(32)この講義は，現代社会でこれから生きていくために自分を磨かなければならないという事が，非常に重要であると感じました。自分の将来についてまじめに考えさせてくれる講義であった。(石)

(33)『現代の経済』という講義名であるが，受験生的思考からの脱却など高校から大学に入っての精神面での改善が必要であると教えられた。またゲスト・スピーカーの話でもやはり思考的な要素が含まれており，思考改革の必要性が改めて分かった。(高尾)

(34)受験を終え，大学生活の始まりである一学期に社会に出るにあたって必要となる条件を提示してもらい良かった。(松本)

(35)問題解決能力を持て，考える事が大切，現場に行け，当事者に話を聞け。(一谷)

(36)我々にとって未知の世界をのぞきこんだような，そんな感じの授業でした。現代社会の一部をかいま見ることができた気がします。(樋口)

(37)ゲスト・スピーカーのシステムは，自分には見えていない現代社会の側面を見せてくれるものであった。そして講義ではそれらの社会問題をもっとグローバルにイメージとしてとらえたり，逆に根本を考える力を学んだ。(亘)

(38)自分から考えた事をしっかりまとめて文にする作業は，日頃したことがなく大変貴重な時間だった。大学生活を送る上でプラスの授業だったと思う。(鈴木)

(39)私が抱いていた大学のイメージは，打ち砕かれた。しかしそれによって自由な時間の海におぼれていた私に，少しずつ，少しずつ『今，そしてこれから私達は何をなすべきなのか』を見せてくれた講義であった。(佐藤)

(40)現代日本の状態がわかったと同時に，ゲスト・スピーカーの方々から得られた知識と情

報をもとにさまざまな事を考えることが出来た。(小山)

(41)問題把握のための『方法』を改めて考え直すことが出来た。自分自身が現在持つ『方法』を振り返ることが出来た。(赤岡)

(42)欧米に対する“追い付き追い越せ”の時代は終わりを迎え，欧米の技術を学ぶ態度から新しい技術を自らの手で考え，工夫をこらす態度へと変えて行かなければならない。(豊川)

(43)このような講義では，1人の意見だけではなく，様々な人の話が必要であり，それを比較することでまた自らの考えの発展につなげれると思うので，ゲストは絶対必要と思う。(湯谷)

(44)先生やゲスト・スピーカーの方々をはじめあらゆる意見・考えがわかり，自分自身をもっと大きな視野を持ち，無駄に生活を送らないようにして行きたい。(林)

(45)受験生的思考という受動的な学習から脱却し，自主的に物事を捉えて思考を巡らせるには，様々な分野に枠を広げ，色々なことにチャレンジしていくことが必要である。(番匠)

(46)私が北大に来て一番得るものが多く，興味を持った授業でした。(田中)

(47)受験生的短絡思考，後発主義からの脱却の必要性。まずは興味・関心を持ち，除々に輪を広げていく，そして専門的人間から多様化のマルチ型人間へと脱皮していく。(後藤)

(48)『現代の経済』といいながらも，この講義では人生の生き方とかやり方を学んだような気がする。(吉田)

(49)受験時代とは違う，新しい物の見方を養うことが出来た。(中村)

(50)ゲスト・スピーカーが，この授業で一番良かったと思う。資料の点ではもう少しもの足りないような気がする。全体としてはおもしろかったと思う。(平林)

(51)この講義を次にやる時は，名称を是非変えてほしい。(更級)

(52)もっと教材をフルに活用した授業をすれば講義の内容も理解度ももっと上がると思います。(深谷)

(53)まだやりたいことが十分に学生に伝わっていないのではないか。せっかくすばらしい内容なのだからがんばってほしい。(渡辺)

(54)『現代の経済Ⅰ』という講義だったが，『経済』から見た講義の割合は少なかったと思う。(飯田)

(55)全体として内容が抽象的で理解しにくい所が多かったけれど，自分のそれを受け入れる基盤を磨こうという課題も出来た。(村岡)

(56)こういう講義があってもいいと思っていたが，選択必修ではなく，ただの選択にしてもう少し少人数で，とっ付きやすいものにした方がいい。(西)

(57)授業に関しては，ゲスト・スピーカーのスピーチ等すごく良かったと思いますが，OHPによる資料が，一部の人しか見られなくて残念でした。(奥村)

(58)講義のテーマ，目標といったものは大変すばらしいと思うので，もう少し学生がそれを受け入れやすいように講義を進めて欲しい。(玉木)

(59)講義内容はいいと思いますが，もっと自分の意見を言いたいし，他人の意見も聞きたい。(太箸)

(60)教官の言いたいことは一つであり，それを何度も繰り返して言っているのだなと思った。(吉見)

(61)『現代の経済Ⅰ』という科目名で“受験生的思考からの脱却”ということをしたため，僕を含め多くの人が戸惑っていた。はじめに何をするのか，その目的をハッキリさせるべきだと思う。(河野)

(62)高校までの授業ではなかったものであったが，こういうものがあるのが大学であろう。しかし経済という名前に関してはよくわからない。(吉川)

(63)米山教授の苦悩。限られた予算と人手と設

備でいかに学生の参加出来る講義を作るか。（古木）

以下のコメントは，8 月 27 日に実施された定期試験の答案用紙の裏面に記されたものである。

(64)やっと自分の将来についての展望が見えてきた。これからの大学生活はその展望を実現するためにいかにして探究心を持って目的意識を明確にして生活していくかである。この講義に出席して先生が 1 番伝えたかったことは大学 4 年間は何もせねば短い。もっと自分にとって有意義に勉強するべきだということを強調されてきた。僕は 1 度留年してきて自分はこのまま何もせず惰性で過ごしていくなあと思っていたが，今は違う。先生の講義と著作を学んでこれからの大学生活をいかに過ごすかという面で大変，自分にとって考えさせられる部分が多く，しっかり内容を吸収していこうと思います。(石)

(65)現代の経済の講義は，前期の講義の中で最も印象に残った。というのも 1 番よく考え，理解しようとしたからだと思う。毎回のレポートは，受験生的思考から抜け出せていない，自分を自覚させられ，自分の想像力をもっと向上させたいと思った。講義の理解をもっと深めるには，人数をもう少し少なくすべきだったかもしれない。あと OHP で写す資料をもっと見えるようになればよかったと思う。大学生活をだらだらだらだら過ごすのではなく自分の個性，創造力を向上させたいと思った。(飯盛)

(66)自分の考えを志向する，おもしろいクセをつけることができるようになりました。入学当初よりは幾分か自分の考えが深まったように思えます。(垣)

(67)受験生的思考は現代の教育現場に多様な価値観が不在なところに原因があるように思います。大学受験の過熱は，社会が発展し教育が普及するに伴って必ず出てくる現象であり，それ自体悪いこととは思えません。(みんなが教育を受けるチャンスが広がったということですので。) しかし日本独特のムラ社会ということでしょうか，受験とは縁のない生き方をする人や，学業で「落ちこぼれ」だった人が阻害されているのは事実です。その結果自分の使命，生まれてきた理由を見失い，迷っている人々が多くなっています。そのような中で受験生的思考からの脱却を図るのであれば今回のような抽象的な探究学ではなく，具体的データを与えて考えを書かせたりする実践的授業の方が効果があったのではないかと思います。大学そのものには何も期待していません。(河野)

(68)約半年間講義を受けて思ったことは，これまで小中高で習ってきたことは“一体何だったのだろう”の一言に尽きます。(更科)

(69)講義を受講して，講義内容は理解できたようには思えますが，だからといって自己の内面的なものが変わったかといえば，必ずしもそうではないようです。ただ現状として「受験生的思考の脱却」は達成できていません。大学 4 年間どう過ごせばよいか何をすべきかが良いか，まだまだ手探りの状態ではありますが，講義を受けて何も考えていなかった自分が恥ずかしくなり，真剣に物事を考えるようになって，前進したといえば前進したように思えます。今までの自分で 4 年後社会に出たら恥じをかくのは自分だし，社会に対応していけないと自覚する機会を得られて幸運でした。これから残り 3 年半有意義に過ごしたいと思います。(須貝)

(70)この講義では経済以外のことについても多く並べたと思う。経済がいろんな世の中の場面と接点があるからだと思うが，やはり僕も多くの人が思っているようにゲストスピーカーによる話を聞けたことがこの講義の他の講義とは違ったところであり僕自身いい情報を得られたという結果を得た。大学らしいとい

えば大学らしいところであったと思う。(谷口)

(71)この講義を受講して新鮮に感じた点を挙げてみます。

a) 今までの受験勉強と違い自由な発想を重んじていること。

b) ゲストスピーカーという外部の人との交流があったこと。この2つの点はこの講義だけの特異な点にして最大の特徴だと思います。僕もこの講義で得た新知識を有効なものとなるように努力したいと思います。(豊川)

(72)先生の授業は今まで受けてきた中にはない大変新しいものだったので大変驚きました。でも面白かったです。(藤田)

(73)1年の前期という最も重要な時期に良い講義を受けることができたと思います。先生が強調された受験生的思考からの脱却は本当に必要になってくると思います。これから4年間自分が“面白いな”と興味を持ったことを追求していきたいと思います。(宮成)

(74)ゲストスピーカーを招いての講義は，今後も継続してほしいと思います。大学という開かれたようで閉じた世界にいる大学生は，もっとこのような機会を得て，外の世界に目を向けるきっかけが必要だと思います。それが受験生的思考からの脱却にもつながるでしょう。それと米山先生のように個性的な人格に出会ったということも現代の経済Iの講義を受けて得た収穫だと思います。(山田)

(75)先生の攻撃的な講義（話）には，初めびっくりしながらも自分がいま何をすべきかを考えさせられた。やっぱり一生懸命に今を生きなければならないと思う。1度しかない人生だから。後悔したくないから，しかもその方が楽しいと思うから。(吉田)

(76)この講義，授業が一番大学らしかったです。先生のやろうとしていることは僕らにとって必要なことであるし，とても素晴らしいことと思うので，これからもよりよい授業を目指して頑張ってください。(伊藤)

(77)テストの時とにかく暑くていき苦しかった。自分がテストに焦っていたというだけではないと思う。E309は南向きで光がさすし，光がさすとあの重たそうなカーテンを閉めているから風は通らないし。(芝崎)

(78)大学に入学してどの講義をどうかと考えた時にあまりに重すぎてかなり強くしてしまった。しかしそれは与えられたものしかこなせないという受験生的思考からまだ抜け出していないだけのことだということがこの講義を受けて分かった。今はもう脱却したかどうか分からないが，この講義で学んだこと大切にしていきたい。(柴田)

(79)もっと使えるコンピューター，サーバーを導入してほしい。(末森)

(80)限られた予算と設備で進める講義としては惜しい講義でした。“受験生の延長ではなく，創造的態度で問題点を分析する”このことはだれからも言われているようで言われていない。自分で分かっているようでわかっていない根本的なテーマであると思います。1年の初めにこのテーマに触れることができて，大学生活への指針はしっかりしたものになったと思います。(田中)

(81)講義の充実度は先生がかなりパワーを持っていたのもあってとても大きかった。また，とても楽しく聴けましたが，ちょっと悪い場所に座ってしまうと声が聞きづらくなったりするので，そのあたりを考えてほしい。(西村)

(82)この講義を受けてゲストスピーカーの制度は素晴らしく新鮮であった。ただ全体にゲストスピーカーの話を聞いてそれをうのみにして「自分の今までの考えはダメでこれからはこうするべき」と思ってしまう傾向があったように感じられた。(ここのコメントを見て)。先生の言われることについても同じで「受験生的思考からの脱却」という行動自体への反論や疑問など（持つ人がいてもいいは

ず）を閉じ込めてみんな同じく脱却を目指すことにもある意味で危険性を感じる。例えば脱却ではなく発展でもよいわけだ。受験生的思考＝悪という形態を決めず，受験生思考を自分からどうするべきか。捨てるのか他の面を磨いて併用するのかを考えるべきだと思いました。

思ったことを書きましたが僕自身やはりその受験生思考をどっぷりつかっていてものを見ること自体の欠陥を感じました。具体的方法含めその解決策を考えたこの講義は大変有意義でした。これから経済に限らず何かを学び研究することでの力となるように考える人になれるように気持ちを切り替えたい。（古木）

(83)今までいろいろとコメントしましたが，自らの考えを膨らます場として，大学にこういう講義は 1 つは必要と再認識しました。（湯谷）

(84)先生の講義は本来こんな大人数相手にやるものとは違うのではないかと感じます。本当なら設備の整った普通の大きさの教室でやるとさらに効果的なものになるのではないかと思います。でも大人数でやるにはやはり設備の面で多少の問題 OHP などが残ると思いました。でも毎回の講義は割と楽しく（誤解がある表現かもしれませんが）参加することができました学ぶことも多かったです。(室内)

(85)面白い講義でした。社会科学の中で最も大学らしい講義だったと思います。ゲストスピーカーによる講義が 1 よかった。（山本）

(86)半年という限られた時間のため，ややペースの早い講義と感じました。もう少しじっくりと分析する力，多角的にものを見る力をつけていきたかった。ただ他の講義と違いこの講義の内容はすべての学問の基礎となるものと思います。できるならもっと他学部の学生を受講できる体制をつくってほしいと思います。（大内）

(87)僕は 8 月上旬に探究学序説読みました。テスト勉強のために読んだのですが途中から考えが変わりました。勉強の大切さを教わったような気がします。何のために大学にきたのかということを改めて考えさせられました。（岡崎）

(88)経済の専門授業というよりも，ものの考えかたというもの学ぶことができた授業だった。以前よりは筋道立てて思考できるようになったと思う。（川上）

(89)受験生的思考からの脱却がいかに大事なことがわかりました。ゲストスピーカーなど有意義な講義であり OHP など不満も残りますが全体としては非常に満足できるものでした。（小林）

(90)講義の内容が内容だけにその場で意見のやり取りができない大人数というのは多少無理があった。しかし逆に大人数なだけに一般的な傾向や多様な考えを知るという点もあってよかった。（酒井）

(91)まず自分の身近なところから改善し，大学の 4 年間を通してはっきり自覚できるように成長したいと思います。自己開発もできない人が（自分のこともできない人が）社会に出て，他人や社会のために何かをしようなんて，無理な話だということがわかりました。（澁谷）

(92)先生の授業を聞きながら納得はするけれどレポートなどでは優等生的回答をまあこんなことで文句も何もないだろ，という文章を書いてしまう自分がいた。このテストでもそれは完璧に抜けきってはいないけれど，やはり真剣に考えることができるようになったと自分では思う。探究学序説はすごく僕らに当てはまっているが実感がよくわかない。でも変化が少しずつ現れているようなので，もっといろいろ経験して考えていきたい。意味のある，味のある授業をありがとうございました。（鈴木）

(93)この授業ではゲストスピーカーを呼ぶという他の授業ではあまり見られない特徴があっ

た。それはとても有意義なものであったと思う。いろいろな職種のゲストの話を聞くことによってそれぞれ違った視点や特徴を持っていることを感じることができた。経済だけの狭い範囲のことだけではなく，経済を通しての日本社会全体や海外のことなど広範囲に触れることができたことがとてもよかったと思う。(田中)

(94)講義を聴きました探究学の教科書を読んでとても参考になりました。受験時代はモデルを記憶することに集中してきましたが，これからは過去に作られたモデルを参考にしたうえで，自分なりの独創を試みていきたいと思います。ゲストスピーカーの話を聞くといった授業展開も，僕にとっては大変役に立つものとなりました。(中村)

(95)半年間先生の熱い講義ありがとうございました。先生の教育に対する情熱は素晴らしくもっと小人数で先生からいろいろなことを学びたかったです。(新野)

(96)この講義は正直いって異色の講義でした。経済らしいこともあまりやらずに終わったのも確かだと思います。それにもかかわらず1回しか休まなかったのも確かです。この講義の最大の特徴であるゲストスピーカーがあったからです。今後ともゲストスピーカーはやめないでください。(深谷)

(97)ゲストスピーカーを招くという方法は非常にためになるものだったと思います。ぜひともこれから続けていってください。(番匠)

(98)この講義はとてもためになったと思います。物の考え方や発想の柔軟であることの大切さも学んだし，ゲストスピーカーの話も役に立ちました。これからも自分で積極的に行動を起こしていろいろなことについて深く考えてみたいと思います。(松田)

(99)半年間とても熱心な講義をありがとうございました。これからもお体に気をつけてこの講義を続けていってください。(水上)

(100)ゲストスピーカーの話はとても参考になるものが多かった。これからもいろいろな専門家の話を聞きたいと思った。(山田)

(101)この講義の名前はやはり変えるべきだろう。(吉田)

(102)最近課長島耕作という漫画を読みました。島は会社の中でのトラブルを自分なりに考えてうまく切り抜けていきます。このマンガを読んでいたらなぜかこの講義を思い出しました。島のように生きるにはやはり受験生的思考ではだめなのか無意識に，考えたからでしょう。先生も読んでみてください。(吉見)

(103)この講義は自分というものを見つめ直すいいきっかけになりました。主に受験生的思考からの脱却が中心でしたが，この授業がなければだらだらとした学生生活になって卒業間近になってこの4年間は何だったのか？

と後悔することになったと思います。目標もでき，勉強にもやりがいが出てきそうです。1年目はまず語学を勉強して英検やTOEFLに挑戦したいと考えています。

またゲストスピーカーの方の講義は本当によかったです。ちょうど私の興味のあることが多かったので沖縄問題，外国の方とのコミュニケーション法と自己啓発，北海道の産業。毎週次回は何だろうかと楽しみにしていました。ゲストスピーカーはこれからの他の講義でもどんどん招いてほしいと思います。(秋野)

(104)この授業で私は自分の思考を考えなくてはいけないと気がつきました。受験を終えて半年が過ぎた今も受験生的思考が消えない状況です。しかし授業のおかげでそのことに気がついただけでも幸いです。もっと自分に積極性を持たせ幅広い思考ができるように頑張っていきたいと思います貴重な講義ありがとうございました。(石井)

(105)この講義，テストで僕は自分なりに脱模範回答を目指しました。まだ完璧とはいえないものだがだいぶ自分の理念とする回答に近

づけたと思います。受験生的思考からの脱却という点も同様です。為になりました。もう少し小人数でやった方がこの講義はさに向上すると思います。教室が広すぎることやはり集中がしにくくなります。(石井)

(106)経済の授業の中で米山先生の授業だけ，他の授業とは異なった展開の仕方でしたが，自分から積極的に考察できたことで言葉では言えない何かを得られたような気がします。(泉)

(107)他の経済の授業とは一風変わっていて面白かったと思う。ゲストスピーカーによりさまざまな人のさまざまな考えに接する機会を与えてくれたこともありがたく思う。この授業がもしかしたらこれから 4 年間ただだらだらと過ごしたかもしれない私にムチを入れてくれたと思う。たくさんの目標はあるのだが実際の行動にはなかなか移せずにいた。そういう時にいろんな人の意見が聞けて自分を見つめ直すチャンスにもなって，とてもよかったと思う。あえて言うなら OHP が見にくかったことが難点で。でもゲストスピーカーを呼んだりする企画はすごくいいので，これからもぜひ後輩たちのためにも行ってほしいと思う。(奥村)

(108)私は米山先生の講義を聴いて日々の出来事などからいろいろと考えるようになった。先生がいつか言っていた“メモ用紙を片時も手放さない”ということも実践している。日常生活の中でのひらめきというのはなんと多いのだろうと自分でも驚いている。逆に裏を返せば私は高校生活という 1 つの巨大な流れのような生活に流され，いかに多くのひらめきと知的関心を無駄にしてきたのかということになる。生徒に厳しい先生ではありましたが，いざ終わってみれば最も重要性を感じる授業だったなあと思います。最後に字が小さくて少し読みづらかったです。(佐藤)

(109)講義に関することではないのですが，“探究学序説”についてとても面白い本だと思います。現代の子供たちのほとんどが塾通いを強いられて，またできの悪い高校生が無気力なわけではないと思います。自分のしたいことがはっきりと見つかりそれを行動に移すだけの勇気というか，やる気のある学生は勉強ができなくても充実した生活を送られると私は思います。それが解らないと焦りを感じる一方で，何事にも無気力になってしまうのだと思います。(坂田)

(110)今までの授業のプリントや今回のテストの第 3 問を見ると，我々は受動的思考に慣れすぎているということが分かった。これではいけないということを考えさせられた点がこの授業で最も得たことだと思う。(高村)

(111)僕を含め我々の多くは経済学，経営学を学ぶのは初めてだし，データの分析や処理についても素人だ。これから先大学であるいは社会で学んでいくためには従来の受験生的思考を捨てる必要があることが必要だろう。このことが理解できただけでもこの講義は有意義だったと思う。このような講義をしてくださった米山先生にお礼を言いたい。(富樫)

(112)この講義に出ていて，本当に考えさせられた。自分がどう大学生活を送るか，ということに限らず，なぜ大学に進学したか，どうして北海道に来たかなど改めて考えさせられた。(野村)

(113)高校までとは違う考え方について考え直す機会ができてよかったと思う。また“大衆教育社会の行方”を読んで，自分のやりたいことのベースができてきたのでよかったと思う。もう少し設備が良かったらもっと講義もやりやすかったのでは？(例：大教室に見合う大画面の TV など)(藤原)

(114)講義の中で繰り返し受験生的思考から脱却するための能動的，創造的，独創的に行動することが求められていた。しかし講義が。ある程度受動的だったのではないかと思う。それは自分自身の問題ではあると思うが，多くの講義に受講生にとっても同じことが言え

ると思う。より多くの学生をより能動的，創造的に生きていくためにもっと学生たちをひきつける魅力的な講義をしてほしい。(他の講義には期待できないから)(本田)

(115)僕は病気で何回か講義を休んでしまいました。でも残りの講義で聞いた「考えていく，自発的になる」ことの大切さをひしひしと感じ，これからの人生の参考となりました。今の授業スタイルがベストだと思うのでこれからもいろいろな学生に語って行ってください。(吉見)

(116)夏休み中“探究学序説”を読みましたのですが，講義で言われていたことがさまざまな例とともに描かれていて少し理解が深まりました。しかしこの本を講義を受ける前に読んでいたら自分で分からなかったことを講義の中で理解できたのではないかと思いました。(渡辺)

7．結論

長い受験生活の中で形成された「単一正解」を指向する社会的視野狭窄から脱して自分の知的好奇心に従い自由にものを考えることが出来ること。その手掛かりを与えることが，入学直後の 1 年生には重要であるといえよう。

「受験生的思考」からの脱却を掲げて展開した「現代経済Ⅰ」をタイトルとした講義が，どの程度成功したのかは，学生達の評価をまつしかないであろう。

大教室を「学習の現場」に転換するためにゲスト・スピーカーのセッションにより学外の専門家から直接学ぶ場面を設営した。これによって「フィールドワークの知」の原体験を持ってもらうことを意図したのである[56]。

この目的は学生達のこのセッションへの高い評価によって達成されたものと考えられる。

「フィールドワークの知」のための基礎となるものは，Note-taking のスキルであることを強調した。特にゲスト・スピーカーの話を聴くに当たり実践することを求めたが，これはほとんどの学生が，それを実践するまでには至らなかったといえよう。Note-taking を促すためにも講義終了後にゲストにコメントを書いて提出することを求めたのである[57]。実践しなければ要求されるコメントが，書けないという場面を設営したが，大きな効果を生むに至っていないといえよう。必須のスキルである Note-taking については，別に新しい訓練プログラムの開発が必要とされている。

さらに学生には「学習と研究」にはオーソド

56)「野外科学(Field science)」による新しい学問の構築については
川喜田二郎 (1973)『野外科学の方法』中公新書

哲学者中村雄二郎は，「臨床の知」の概念を発展させてそれを「フィールドワークの知」とも規定している。
中村雄二郎 (2000)『臨床の知』(著作集第 11 巻) p. 11 岩波書店

教室外で企業調査，地域調査などの「フィールドワーク」の方法を活用した演習を行い，学生に「野外科学」「現場の科学」「臨床学」の訓練を行うことは可能である。問題は教室内にいかにして「フィールドワークの知」の空間を創り出すかということである。新しい教育プログラムの開発が必要である。
Sala Delamount (1992) “*Fieldwork in Educational Setting : Methods , Pitfall and Perspectives*” The Falmer Press

57) 現代日本の学級崩壊は，親と教師の「教養の崩壊」にその真因があるとする見解については
筒井清忠編 (1999)『新しい教養を拓く—文明の違いを超えて』岩波書店

“教養”は教える者と教えられる者との間における全人格的な切磋琢磨を通じて伝えられるものである。一期一会の真剣勝負の場面を設営してゲスト・スピーカーの人間的存在から発するものに触れることにより，新しい世界に目を開かれること—これが教養 (一般) 教育の生命であると考える。教師—学生の役割が固定化されてしまい，切磋琢磨，相互研鑽の精神を教室に回復することは，困難である。この困難を克服するために《ゲスト・スピーカーと学生》という場面を設営したのである。

ックスな方法が存在することを認識させ，ごく初歩的であっても演習を行うことの重要性が確認された[58]。社会科学的研究には，まず自己の存在と生活経験さらには社会を客観化，相対化して把握することが不可欠である[59]。だがそれを単に教壇から「問題意識を持て」と語りかけるだけでは無意味である。自らの意識と行動様式を対象化して把握するためには，自己と所属する集団を同時に客観化しなければならない。このためには「日本社会に対するイメージ」の集計のフィードバックによる情報共有化さらには「大学・短大進学率」など具体的な問題の把握と思考結果の自己確認及び集団全体の傾向を示す集計のフィードバックによる情報共有化が意味を持っていると考えられる。

集団内に情報が共有化されることは，集団全体の傾向を認識出来るだけでなく，氏名入りコメントのフィードバックによって「自分と同じ意見を持つ人」，「違った意見を持つ人」を相互に確認出来る契機となっている[60]。

〈問題発見⇒問題提起⇒問題解決〉の思考と行動様式は，「教養」の基本である。この修得のために将来のキャリア・プランと関連させて学生時代の能力開発の具体的行動を考える課題を設定したのである[61]。4 年後の 2000 年 3 月卒業時における学生たちの職業選択の結果は，第 6 表に示す通りである。自己の思考様式の特徴を確認した後に，それを生かしてどのような具体的行動に進むことが出来るのか。観念の世界に止まり，抽象的な言葉と言葉をつないだり，単に言い換えをおこなうことからは，現実世界に踏み込んでいく情熱と行動は出てこないのである。抽象的な言葉からどれだけ具体的な行動をイメージしてそれを実現させることが出来るのか。これは大学教育でその重要性が，ほとんど認識されてこなかった能力である。身体的な自己表現，コミュニケーション能力，手を

58) A.W.コーンハウザー／山口栄一訳（1995）『大学で勉強する方法』玉川大学出版部
Katherine M. Ramsland (1992) "*The Art of Learning*" State University of New York Press
米山喜久治（1993）『探究学序説』第 4 章　探究の方法　文眞堂

59)「滅私奉公型の旧世代においては，ハイテク時代の変化についていくために，ますます失感情症に陥る危険性が強まり，心身症になる人が増加している。一方若者たちも旧世代との縦の関係をなかなか持つことが出来ないまま，狭い仲間意識にもとづく表面的な横の関係をのみかたくなに守り，自分の殻に閉じこもっている者も少なくない」
熊井三治・藤井真一（1993）『失感情症時代を生きる』pp. 57～58　朝日新聞社
日本の若者が，自己中心的行動をとるのは，しつけ，社会的訓練不足による脳（特に前頭葉）の未発達が原因であるとする見解については
澤口俊之・南伸坊（2000）『平然と車内で化粧する脳』扶桑社
現代日本の若者は，人を傷つけることには平気だが，自分が傷つくことを異様に恐れる傾向を持っているとする見解については。
町野静男（2001）『自己中心性の病理』双葉社

60) 日本においては個人が絶対的存在〈神〉を媒介にして社会と結びつくのではなく，“世間”がその間に存在する。《個人》⇔《世間》⇔《社会》という構造が存在している。この世間は，個人を全人格的に包摂する機能を持っており，個人はこれを逃れて生きることが出来ない。「どこにいてもいつでも群れている私たち日本人である。その私たちの群れの掟が世間なのである。」
阿部謹也（1999）『世間とは何か』講談社現代新書
自我の確立にとって不可欠なのが，自己対象化である。どこまでも日本人を捉えて離さない「世間」を対象化し，把握しなければならない。そのためには，自己の所属する集団の行動特性を把握する必要がある。学生の「集団」としての思考と行動様式に関するデータのフィードバックは，「世間」の支配から脱する手掛かりを与えようとするものである。
阿部謹也（2001）『学問と「世間」』岩波新書

61) 広中平祐は，従来の科学研究が，working hypothesis が出来てから後のプロセスが重視されてきた。しかし前段の working problem（問題の選定）が，もっと重要であると力説している。
岡村誠三（1991）『科学に遊ぶ』p. 32　PHP 研究所
問題の全体像を把握し，その意味を知るためには，仮説的推論すなわちアブダクション(abduction)が重要な位置を占めている。アブダクションを「仮説を構想する想像的推理」とする見解については
都城秋穂（1998）『科学革命とは何か』岩波書店

働かせて作品を創る能力そして問題解決への行動力を再認識しなければならない。このような能力の持つ意味を正当に一般教育の中に位置づける必要があると考えられる[62]。

学生達のこの講義に対する評価結果は，集計表及び個人のコメントを含めて学生達に全てフィードバックされた。

1977年に「探究学」をベースにした「一般教育」の開発を志して以来既に四半世紀の時が流れてしまった。1996年度の経済学部新入生に対する『現在の経済Ⅰ』の講義において少し

---

62) ヨーロッパ中世史家の阿部謹也によれば，中世ヨーロッパの職人の世界においては，身体的な自己表現が重要な意味を持っていた。
阿部謹也（1995）『教養とは何か』講談社現代新書
教養教育において必要なのは，問題の発見能力の向上，問題解決の具体策を構想すること，その実施手順を設計出来ることである。そして最も重要な点は，身体表現として行動するエネルギーを回復させることである。
文部科学省（文部省）は国立大学の独立行政法人化に引き続き2002年度から大学の研究水準を世界最高レベルに引き上げるために「トップ30」政策を推進しつつある。こうした状況の中で大学の教育機能に対する関心が薄れ，一般教育(教養教育)は，その存在すら忘れ去られようとしている。
アメリカの大学では，リベラルアーツ教育が，大学の世俗化を防ぐ知的な防御壁と考えられてきた。
Jon H. Roberts and James Turner (2000) "*The Sacred and the Secular University*" Princeton University Press
日本の大学における一般教育（教養教育）は，宗教性の希薄な社会にあっては，キリスト教の影響力がまだ残っている欧米とは違い，一層重要な役割を果たさなければならないであろう。物質文明がその極点に達して自己の欲望の実現が，人生の幸福の実現であるとするような風潮が強くなる傾向にある。こうした中で学問研究の前提条件となる事実の正確な把握のためには，偏見を生み出す根源的な要因になっている己の欲望をひとまず側に置いて，虚心坦懐になって事実とデータに臨むことが要求されている。虚心坦懐すなわち偏見を持たない禁欲的態度の訓練は，社会生活において必須の倫理性を陶冶するものであるといえよう。社会科学といえども客観性の追及の美名の下に人間性，倫理性が排除されており，専門教育からは，倫理性の陶冶を期待することは出来ないのである。
教養教育の再興のためには伝統文化の継承と身体感覚をベースにした知識の習得プロセス(learning by doing)が，鍵になるであろう。大衆化，国際化，情報化の波を世界の先端を切って受けている20世紀末のアメリカの大学における研究と教育の諸困難については
Bill Readings (1996) "*The University in Ruins*" Harvard University Press
1960年代イギリスでは，ひとつの「夢」としてイングランドに7校の新大学が誕生した。「21世紀へとイギリスを導くような“学問の新地図”を描くという新大学の夢は，一握りの大学の新設というだけでは，達成されなかったし，実際，実現されないであろう。1990年代の我々にとって必要なのは，ただ単に個々の大学を新設することではない。重要なのはひとつの夢を実現すること，すなわちイギリス高等教育全体を再構築することである。」
H. J. Perkin／有本章・安原義仁編訳（1998）『イギリス高等教育と専門職社会』p. 141　玉川大学出版部
イギリスの高等教育が直面している問題は，日本のそれと同じような様相を呈しており，一般教育(教養教育)問題は，単にカリキュラムの問題ではなく，日本の大学教育制度全体のイノベーションのために再設計されなければならない。
東北大学では既に「一般教育」の改革に取り組んだ実績が報告されている。教養人である夏目漱石や寺田寅彦らの教養の所以は，その「専門性の飽くなき追及の傍らで，同時に専門性から自在に離脱できるその生き方」にあると規定している。さらに東北大学での教育実践の経験を踏まえてますます必要とされる「一般教養」教育の復権には，「1，2年生にではなく，卒業間近の学生に，一応専門の教育を終わりつつある学生に一般教育を行う方式」，「定年間近の教授たちによる概説的な講義演習など組織的に高学年で教える」，「専門領域での卒論と同時に学際的な主題に関する研究を課す」等の改善策が提案されている。
各大学はこの提案を受けて大いに実験精神を発揮して21世紀の教養教育の在り方を探究する必要があるだろう。
沼田・増淵・安西・加藤（1996）『教養の復権』p. 176, p. 214　東信堂
「一般教育のカリキュラム編成をめぐって新しい実利的価値を尊重する近代派と伝統的な真理に価値をおく古典派の論争を踏まえて，歴史的に検討を加えた文献として
W. B. Carnochan／丹治めぐみ訳（1996）『カリキュラム論争―アメリカ一般教育の歴史』玉川大学出版部
21世紀地球環境時代，情報化社会における日本の大学における教養教育の再設計のためには大衆化の先進国アメリカの歴史的経験に学ぶべきことは多い。

第6表　平成11年度　卒業者の産業別就職状況

産業区分	内定者数	産業区分	内定者数	産業区分	内定者数	産業区分	内定者数
農業	2 (1)	精密機械器具	1 (1)	政府系金融機関	5 (1)	不動産	
建設	2	石油・石炭製品		長期信用銀行		サービス	27 (6)
出版・印刷	6 (2)	その他の製造業		都市銀行	3	国家公務	11 (3)
化学	4	電気・ガス	3	地方銀行	9 (1)	地方公務	11 (1)
繊維工業	2	運輸	5 (1)	信託銀行	2	その他	1
鉄鋼	1	通信	6 (2)	その他の金融	4		
金属製品		卸売	4 (1)	証券	2 (1)		
電気機械器具	6 (1)	小売	7 (3)	生命保険	5 (1)		
輸送用機械器具	5 (1)	食料・飲料	7	損害保険	2	計143 (27)	

備考　（　）は女子で内数　　平成12年3月31日現在

は前進出来たのではないかと考えている。

今回の経験に基づき「一般教育」を改善するための具体策として下記の諸点をあげることが出来る。

1）まず大教室には最新のビデオ，スライド，OHP，パソコン等のAV機器の整備が必要である。最後列の机を使う学生にも最前列の学生と同じ質の情報が届くような環境が確保されなければならない。教室の情報機材のハードウエアの整備がまず第1の条件である[63]。

2）さらに教室の机とイスのデザインの変更が必要である。特にイスは，固定式ではなく，移動あるいは回転式として，1つの机を囲んで6人程度の小集団が編成され，グループ討議が可能なレイアウトが必要である。

3）次に大教室の大集団を小集団を単位に編成し直し，この小集団にTA（ティチング・アシスタント，助手または大学院生による）を配置することが必要であろう。

4）中規模，小規模教室の増設による教員と学生の間の顔と顔の関係の復活

5）学生の回答したアンケート調査の集計とそのフィードバック。提出されたレポートにコメントを書いてフィードバックするシステムのためにはTAの貢献が期待される。

6）図書館員（ライブラリアン）のリーダーシップによる情報検索，文献探索ガイダンスの充実が必要であろう。

7）通年で「メンタルヘルス」に関する講義を開講する必要がある。また学生の相談に応じるカウンセリング担当の専門家の配置が必要である。[64]

63) 200人規模の大教室での講義時間中の質疑応答は，現実問題として学生が手をあげて質問を行うにはかなりのプレッシャーを感じ，勇気とエネルギーのいる行為となっている。
講義終了後質問のある学生が，直接話しかけてくることもあったが，これは少数に止まった。また学部の研究室まで訪ねてきて直接質問を行い，進路相談に対するアドバイスを求めた学生もいたが，これは極めて限られたケースであった。

64) 経済学部3，4年を対象に1996年度集中講義を開講した。
テーマ『テクノストレスとメンタルヘルス』

8）留学生のためには適切なガイダンス・システムと専門家の配置が必要である。
9）異質の交流を実現するための国内，国際的なヒューマン・ネットワークを構築する。
10）外国の大学との交流協定の締結を促進する。
11）新しいテキスト，データブック及び教材ソフト（ビデオ，スライド，ビジネス・ゲーム等）の開発。

講師　国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部長　丸山　晋　氏
1 年生から 4 年生までの自由に受講できるカリキュラムを提案しているが，未だ実現していない。最近年北海道大学全体として複数の学生が自殺するという悲劇が起こっている。
「メンタルヘルス」への対応が急がれるのである。